

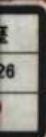
大 館 市

柏 田 遺 跡

発掘調査報告書

1974-3

大館市教育委員会



大 館 市

柏田遺跡

発掘調査報告書

秋田考古学会員 奥山 潤

秋田考古学会員 板橋範芳

大館市社会教育課 斎藤 隆悦

1974・3

例　　言

- 1 この発掘は 大館市教育委員会教育長吉成成敏を法的発掘責任者とし 奥山 潤を 発掘担当者とした調査である。
- 2 発掘調査は 昭和48年3月25日から4月8日までの15日間に行なったものである。
- 3 写真是 大館市の越前貞一氏 大館市史編さん室 板橋範芳及び 教育委員会斎藤隆悦による。
- 4 この報告書は 3～4章の第1部と 5～6章の第2部に分かれ 第1部には紋陶文土器を 第2部には 土師器と須恵器を出土した 方形堅穴群について書いてある。
- 5 第1部は 担当者が書き 第2部は 担当者の指示により 板橋範芳が書いた。
- 6 全体を奥山が編集した。



序

文

この報告書は 大館市教育委員会が主催して発掘を行なった 大館市柏田遺跡の調査結果をまとめたものです。

この遺跡は 採土砂工事中に発見されました。工事のために遺跡が破壊されますので その前に遺跡の内容を明らかにする目的で 昭和48年3月25日～4月8日の15日間にわたって 発掘調査を実施したものです。

わたしたちの祖先の生活の一端を 市民のみなさんに理解していただくため、ご活用ねがえればさいわいです。

発掘調査にあたって 担当者をきひうけられた 長山 潤氏 時々雪の降る悪天候について発掘にあたった調査員板橋範芳 斎藤隆悦 発掘を援助された高橋昭悦氏と小山純夫氏並びに発掘員大館工業高校 大館鳳鳴高校 大館商業高校 大館桂高校社会部生徒のみなさん マイクロバスや ブルドーザーなどの手配 ご協力をくださった日景建設社長に 心から謝意を表します。

昭和49年2月27日

大館市教育委員会 教育長 吉成成敏

目 次

序 文

大館市教委 教育長 吉成成敏

目 次

図・図版目次

例 言

1. 緒 文	1
2. 遺跡の位置と自然	1
第1部 細岡文式土器	
3. 遺物について	1
4. 小 察	12
A 稲田遺跡の調査日記ふう考察	12
B 細岡文土器について	16
第2部 壁穴と土器器	
5. 遺構について	20
6. 出土遺物について	25
7. 考 察	38
8. 結 括	41
9. 謝 辞	42

図・図版

Fig

Fig 1(a)	遺跡位置図	2
Fig 1(b)	遺跡付近地籍図	15
Fig 2	須恵器片拓影図	4
Fig 3	発見の端縁となった土器	5
Fig 4	口縁部の破片	7
Fig 5	口縁部頸部肩部破片	8
Fig 6	口縁部肩部及びふたと思われる破片	9
Fig 7	台部を主とする破片	10
Fig 8	胴体部の破片	11
Fig 9	繩文だけの胴部破片	12
Fig 10	底部及び台脚部の破片	13
Fig 11	つば形の破片	14
Fig 12	ピット中から出土したつば	14
Fig 13	遺跡全体図	20
Fig 14	1号竪穴実測図	21
Fig 15	2・3・4号竪穴実測図	22
Fig 16	5・6・7号竪穴 円・角柱据立柱建物実測図	24
Fig 17(a)	1号竪穴黒色土内出土土器	26
Fig 17(b)	1号竪穴カマド前庭部出土土器	27
Fig 17(c)	1号竪穴カマド前庭部出土土器	28
Fig 17(d)	1号竪穴カマド前庭部出土土器	29
Fig 18(a)	2号竪穴内出土土器	29
Fig 18(b)	2号竪穴及び焼土内出土土器	30
Fig 19(a)	3号竪穴外覆土・3号竪穴上覆土内出土土器	31
Fig 19(b)	3・5号竪穴間地山直上・3号竪穴南側2号同準出土土器	32
Fig 19(c)	3号竪穴内上位・中位・床面出土土器	33
Fig 19(d)	3号竪穴カマド上・カマド前庭部出土土器	34
Fig 20	4号竪穴内出土土器	35
Fig 21	5号竪穴内出土土器	36
Fig 22	6号竪穴内出土土器	37
Fig 23	第1号竪穴の想定復原図	39

PL

口 紙	フラスコ型ピット底部のつぼ
PL 1	(左) 大船町遺跡 (右) 柏田遺跡 第3号竪穴付近 3
PL 2~11	表 掘 土 器 3~19
PL 12	遺跡付近写真 43
PL 13	遺跡写真 43
PL 14(1)	第1号竪穴写真 北より 44
PL 14(2)	第1号竪穴カマド前庭部付近 北より 44
PL 14(3)	第1号竪穴堆出土状況 45
PL 15	第2号竪穴北ピット 45
PL 16(1)	第3号竪穴 北西より 46
PL 16(2)	第3号竪穴カマド前庭部 東北より 46
PL 16(3)	第3号竪穴カマド前庭部掘り込み部 東より 47
PL 16(4)	第3号竪穴カマド画面写真 47
PL 16(5)	第3号竪穴北東部擴張部 47
PL 16(6)	* カマド前庭部 48
PL 16(7)	* 堆出土状況 48
PL 17(1)	第4号竪穴 東より 49
PL 17(2)	* 南より 49
PL 18(1)	第5号竪穴 南東より 50
PL 18(2)	第6・7号竪穴 北より 50
PL 19(1)	掘立柱建物 東より 51
PL 19(2)	* 西より 51
PL 19(3)	円柱掘立柱建物 北より 52
PL 19(4)	角柱掘立柱 北より 52
PL 20	出土土器 53
PL 21	* 53
PL 22	* 53
PL 23	* 53
PL 24	* 54
PL 25	* 54
PL 26	* 54
PL 27	* 54
PL 28	* 55
PL 29	* 55

1 緒 文

柏田遺跡とは 地籍は大森上岱であるが 柏田集落の北に近いので そう呼ぶことにした。 柏田の北西 柏田川を渡って 約250mの河岸段丘の上にあり [Fig 1(a)] 大館市の中心から 北々東に約8kmの距離にある。

この遺跡は 土砂取りのため 土建業者がブルドーザーで工事を始め 上表の黒土は削り取った平地におき残していた。 [PL 1(右)]

続縄文土器はその中から採集したもので すべて破片だけである。第1部で それについて説明する。

また段丘の上表黒土と 黄色のロームの間からは 土師器の方形豊穴が 敷戸群集していたので それを発掘調査した。それについては 第2部でまとめて説明する。

尚 この遺跡は 調査後ブルドーザーで削り取られ 遺跡とその南北の両側は 現在なくなってしまった。これはその一部の記録にすぎない。

2 遺跡の位置と自然

遺跡の位置については 1に述べたとおりであるが 北西まぢかに山があり 東側は柏田川に接する。柏田川は北から南に流れ 比較的急流で浅く 河床には岩石が露出し 平地は十和田火砕流の第2次堆積物からできている。河岸には川原が発達していない。昔の交通路は大森から遺跡に通じていた。北東約1kmには大館と呼ばれ ほぼ土師器の方形豊穴と 同じ時期と考えられる 大きな遺跡がある。

北西山地を除いては 狐に通した場所ではなく 柏田川が 昔も現在のように浅かったならば 魚(の漁)も少なかったろうと考えられるから あまり生活に通した所ではなく かえって南西側の大森側が 食糧を手に入れるのに適していただろう。

水田 その他については その所在地がわからない。東側大館遺跡との間は 現在水田で 当時は湿地帯であったろうと思われるが 両地区の間は 山際を過ぎて 交通可能であっただろう。

第 1 部

続縄文式土器

3 遺物について

第1部の出土品については その全部が表探したものであり その包含量は 全く破壊されてわからないから その全形について またその編年については 正確に言い表わすことができない。

例えば ふたについては 台と区別しにくいものがあり その他についても 詳しく言い表わすことができない。

ここで取扱った出土土器には 本県で始めて発見の続縄文土器などが多くそのため 全部の拓影を示し便宜上以下のように分類した。



Fig 1(a) 遺跡位置圖

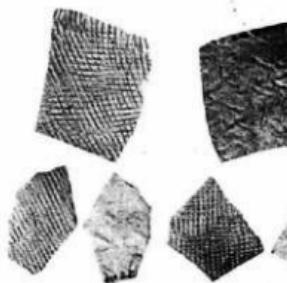
この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。(承認番号) 昭48・第948号



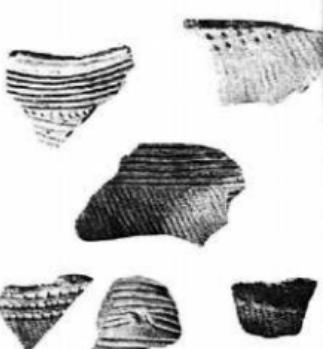
PL 1 (左) 大熊野遺跡



(右) 柏田遺跡 第3号井付近



PL 2



PL 3

第1群 須恵器

第2群 統繩文土器

第1類土器 発見の縦縞となった土器

第2類土器 口縁部破片

第3類土器 脊部部破片

第4類土器 底部破片

第3群 石器

第1群 須恵器

Fig 2 PL 2は 表面須恵片の全部である。わずか3個しかない須恵器を全部出したのは 内面に面木(あてぎ)の模様があるからである。2と3は同じ器体であるらしい。1は2・3に比べて厚い。1・2・3ともに器表は たたき文で 内面の面木の模様は 本県では類例がない。焼成は良く 色沢はねずみ色である。いずれも破片で 形はわからないが 1は大型の蓋であろう。

Fig 2の内面は 断面の右側に示した。

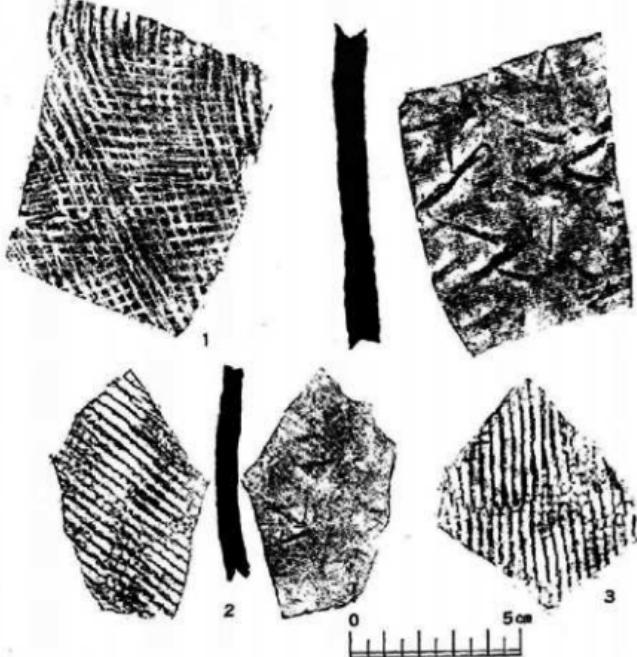


Fig 2 須恵器片拓影図

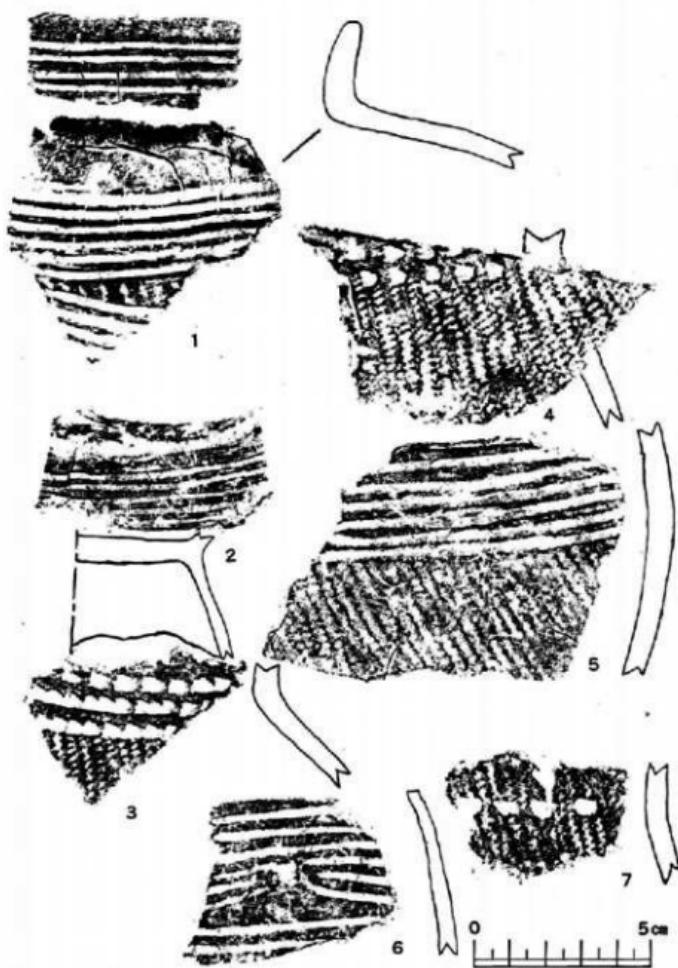


Fig. 3 発見の断続となった土器

第2群 縦縞文土器

第1類土器 発見の端緒となった土器

Fig3 PL 3及び口絵写真は 遺跡発見の端緒となった 土器片の全てである。Fig3の1と2は おそらく連続するもので 1は口縁部分で 2は台脚部分である。色彩はともに黄褐色で明るい。器表はよく磨かれている。たぶん 大型の壺の破片であろう。3はおそらく 胴体上部または肩で 4はまったく肩であろう。器体にやや垂直な縞文を多く施し 体上部は棒状の角張った工具で 左から右に連続 あるいは間隔を置いて 列点文を2段(4) 3段(3)につけている。5はこれも肩部で 肩に平行に六条の沈線を施し やや黒色を呈し 深鉢または壺であろう。厚く大型の土器の破片である 6は平行沈線による 变形工字文が見られ おそらく台脚の破片であろう。7は口縁に近い首部の破片で 頭部にやや間をおいた 丸棒状工具による連続刺突文が施文され 色澤は黒色を呈する。

第2類土器

Fig4 5の一部分などは第2類の口縁部破片である。Fig4の裏には沈線による平行線があるものと 1個だけであるが 口縁に斜めの縞文を施したものがある。

Fig4の1 2 4などは やや古い形の縦縞文土器であるが 1 2は全く縞文が見られない。4は幅をおいた縞文が 壺に施文され 6には穴が1つ見られる。8 10などは 実起部分であろう。8 10等には 実起の先端に 明らかなV字形の刻みが 1個つけられている。8 9 10等の内側にも裏面と同じような水平の沈線が見られる。Fig5は 1から10まで 口縁部であり 3は口縁部の右端が 著しくあがり 5の肩部には 指先で押した刺突文があり 7には 簡単な弧が1本の沈線で描かれている。11は 肩の部分であり 13は7本の平行な沈線が見られるが 肩が台部の破片か よくわからない。12は肩部の破片で 肩上部の壺の縞文の一部が見られる。最後の2つは 沈線がこれまでのものと異って シャープである。

Fig6は 口縁部及び肩部の破片及び壺と思われるものも 2個含んでいるが 2 3は平行な沈線 及び破線状の沈線を施文し 4は口縁部と胴部との境に 低い隆起が見られる。8は口縁と思われる部分に 丸い刺突文があり 10 12は 壺の破片と見られる。

Fig7の1 2 5は 縞文の地文に 沈線文をつけたものであり 同図3は縞文の地文に 丸棒状の工具で刺突文を並べたものである。Fig7の4 6 8は 土器の台脚部であり 同図7はつばの底部の破片である。同図5は 体部に曲線文で文様を描き 9 10 11にも沈線文が見られるが 9はふたと思われるものの破片で 10はわからない。11はおそらく 肩部であろう。

第3類土器

Fig8及びFig9は 胴体部の破片である。Fig8は丸棒状の工具で沈線による平行線文 及び刺突文をつけたもので 縞文は見られない。2 3 5 6 7には 刺突文が見られ と同時に変形工字文がある。

Fig9は すべて縞文だけで 胴体部の模様と見られるが 縞文が細かいもの 例えば5 13 20 25 26 28等があり 粗いもの例えば 6 8 9 11 14 16 19 23などがある。またFig7 2 3 5 等も胴部の模様であり 2 5には上記のように縞文を囲む弧状の 沈線が見られる。2の沈線の一方の外側の縞文はすり消してある。同図3には 粗い縞文を地文とし 一端に丸棒状の工具による 刺突文が水平に並んでいるのが見られる。

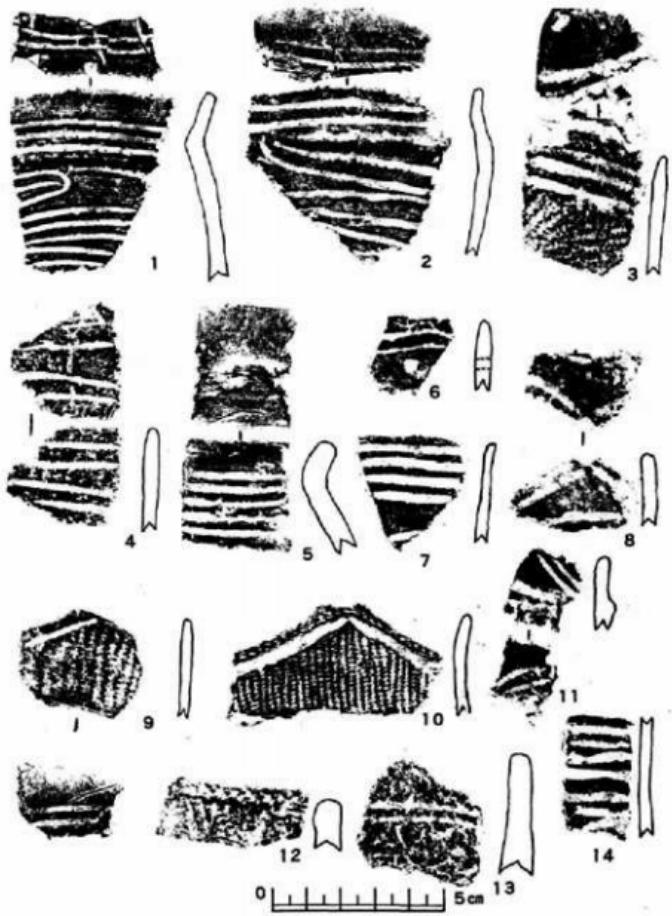


Fig. 4 口縁部の破片

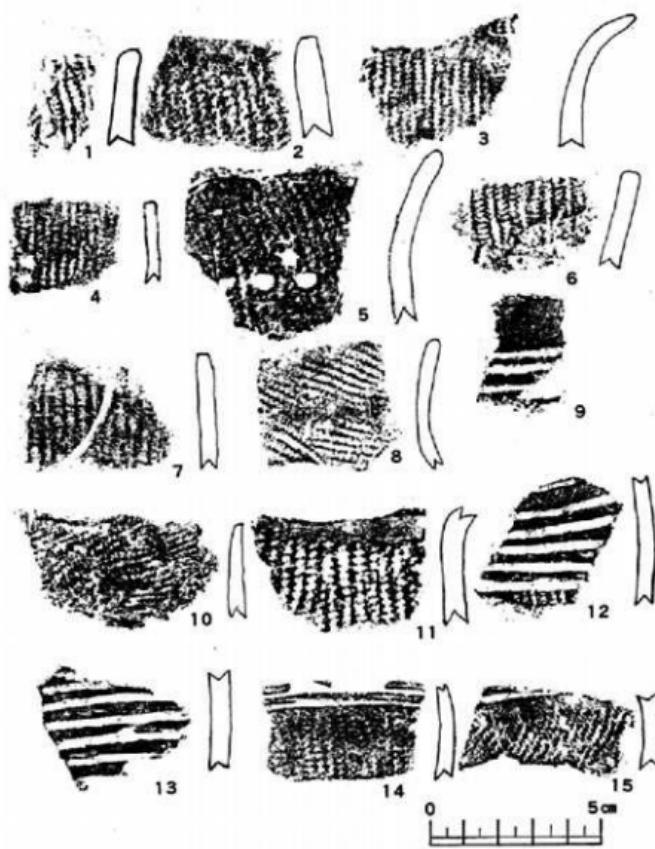


Fig 5 口縁部頸部肩部破片

第4類土器

底部の破片及び 脚台部 Fig7とFig10の4 6 8 10などは 脚台部破片やつばの底部であると思われる。Fig10の1 2 4には いずれも底面が表われている。

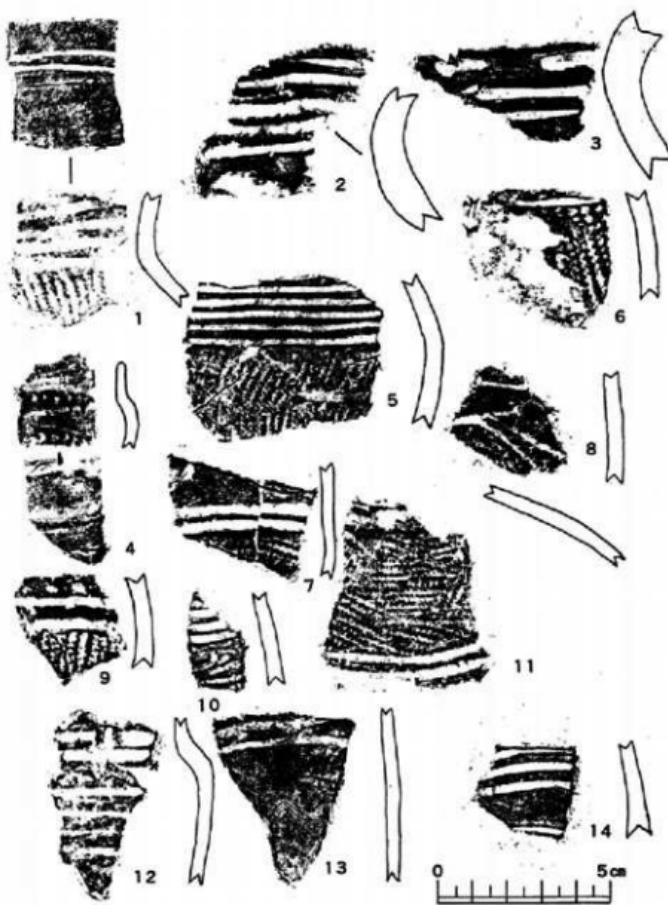


Fig 6 口縁部肩部及びふたと思われる破片

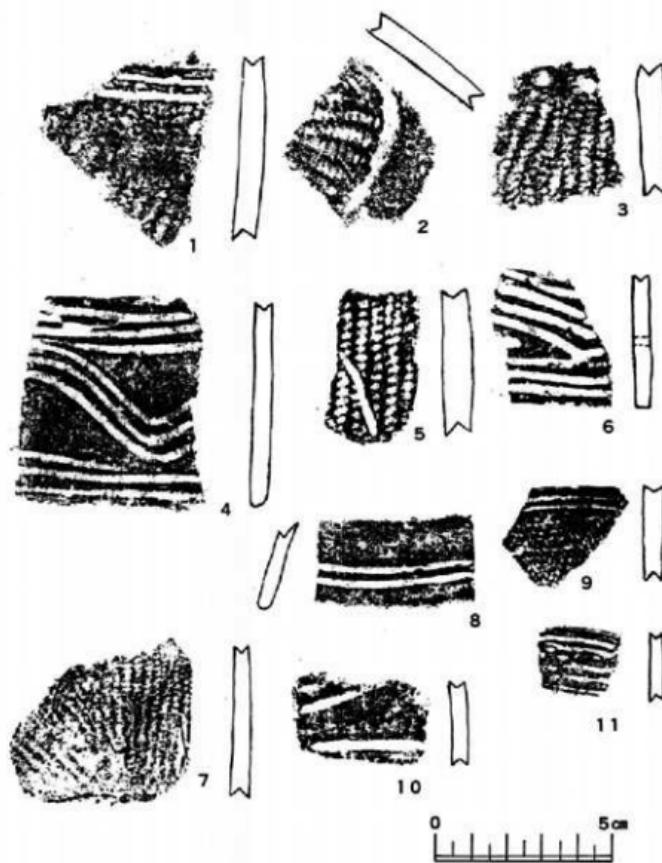


Fig. 7 合部を主とする破片

第3群土器

Fig. 11とFig. 12は つぼ形の土器である。Fig. 11は おそらく口縁に4つの突起をもつ つぼの一部であろうが その突起の1つがあらわれている。山形の突起の頂部が V字形の2つのきざみにより 2分され 突起の頂部は 3つに分かれている。文様は特に口縁部文様体がなく 口縁の端より胴部にいたるまで 縞の網文が見られるだけである。

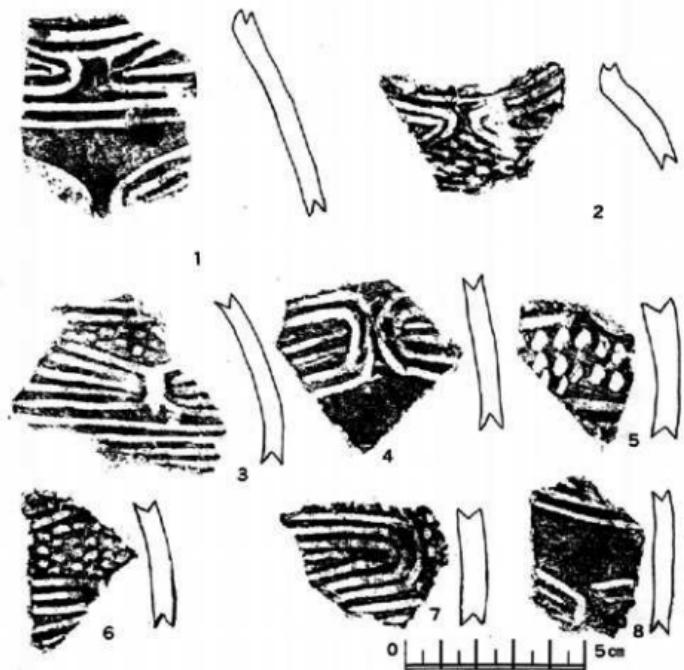


Fig. 8 銅体部の破片

Fig. 12のつばは 砂とり場にあらわれていた やや長いフラスコ形ピットの断面の1部の底に 伏せられて発見されたもので 口縁部の一部を欠くほかは 完形である。ほかにつばの小さい台部と 口縁部の小破片をともなっていた。やや完形に近いつばは 口径16.6cm 高さ17.5cm 底径6cmであり 口縁部がやや外反し 肩が口縁部より外にはり出す。口縁は 10コの低い波形口縁をもち 内側に1条の細い沈線があり 口縁の上限に2本 下限に4本の平行な沈線をほどこす。綴文は 口縁部に垂直である。器表には 地質物が付着している。

第3群 石器

石器は PL. 11に示したのが 全部である。いずれも表面採集のもので 形を整える為に 打ち欠いたものでなく 剥片であり 何とも名前をつけがたい。また その時代についてもはっきり言うことができない。

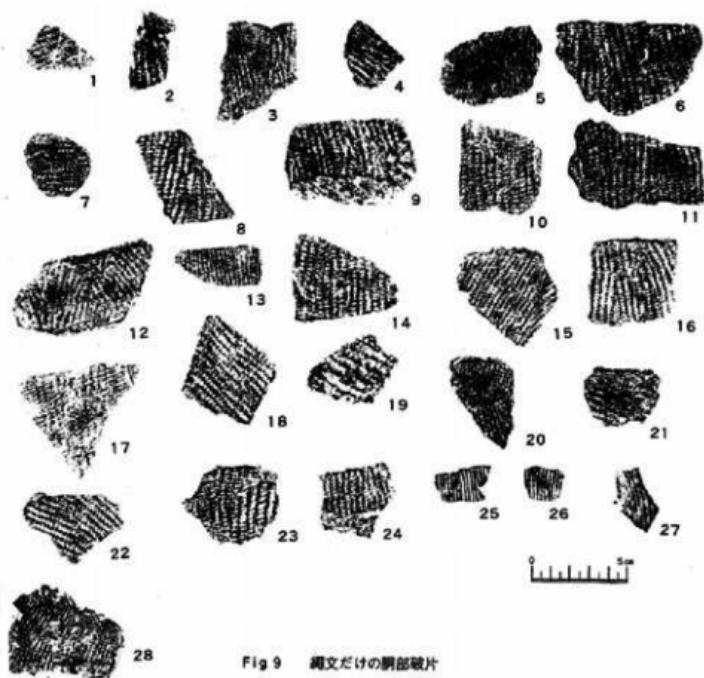


Fig. 9 織文だけの陶部破片

4 小 察

A 稲田遺跡の調査日記ふう考察

稻田遺跡は 昭和48年3月25日から4月5日まで調査された。前にも書いたとおり 地籍は稻田の北西
柏田川を隔てた対岸の大森上岱である。第1部に書いた 織田文式土器を除いては 第2部の第1号ないし第7号の土師器または須恵器を出土する堅穴などは 発掘によって発見したものである。

3月25日以降 大館市教委の斎藤氏 及び市史画さん室の板橋氏が2回にわたり 予備調査し その後市教委教務長の正式依頼によって 奥山が発掘担当者となり 教委社教課 斎藤氏 奥山の助手として富沢正雄君 及び原田幹子君の4名が2日間の予備調査を重ね 発掘に至った。板橋氏らの予備調査では 表土の厚さが60cm~80cmあり その発掘は容易でないと思われたが ブルドーザーで削土することにした。

ブルドーザによる削土でも 第2号堅穴以下は 発見が容易でなかったが 小山氏の第1号堅穴発見により この報告書の第1号方形堅穴の発掘から始めた。全期間中 雪あるいは みぞれ あるいは強風に悩まされ その調査は決して 楽なものではなかった。

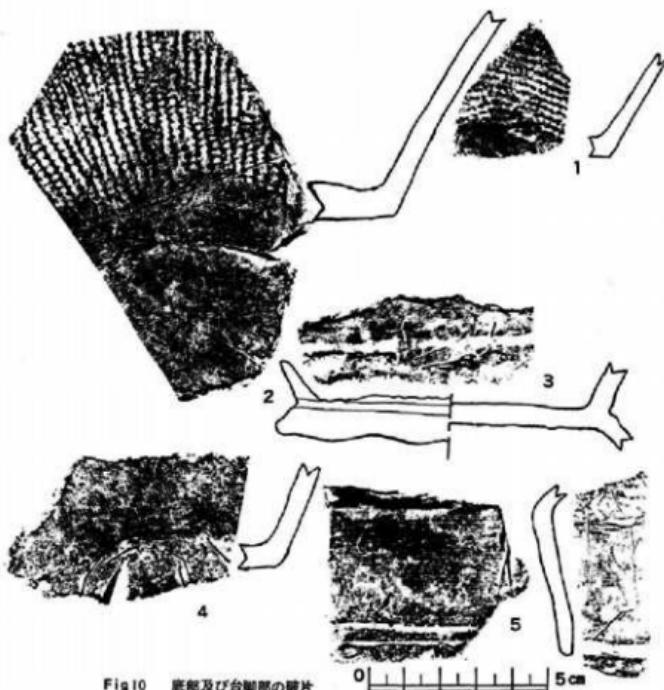


Fig 10 底部及び台脚部の破片

第1号竪穴

長辺が正しく磁石の南北をさし 外周の一辺が約7mで 内側にこれと平行の 二重の周溝を這らし 南西隅に直径 2.5m から 3m 位の石圓い炉を持ち 周溝は深き外周で 15~18cm 内周で 14cm あまり深くない。外側の方形竪穴には 4個に 30~40cm 位の柱穴 周溝内と内側に 20~40cm 位の櫻で割った 長方形の柱穴 6~7個を見る。内側は周溝の中に深さ 11cm~30cm ほどの角柱がみられ 石圓い炉の外側には 土器を置いたと思われる穴が 並べられていた。この竪穴は 二重の周溝を持つ 二重構造のようにみられ 内側の周溝に囲まれた中は 階段きれいであった。竪穴の外側北東に 長さ 5m ほどの溝が現われたが これ以上 発掘はできなかった。もしも石圓い炉に 年中焚火(たきび)を絶やさず もちろんそばのかまどに 每朝火を移したとし 南東側に入口があったとすれば かまど前を過らずに 竪穴の部屋の中にはいれ かまどの前には特殊な人物(女性)だけが座わり あるいは 竪穴全体が女だけの住居であるかのように思われた。竪穴の中からは 大量の遺物が出土した。出土遺物中には 内黒土師器の壇 かめだけで壇はないようである。

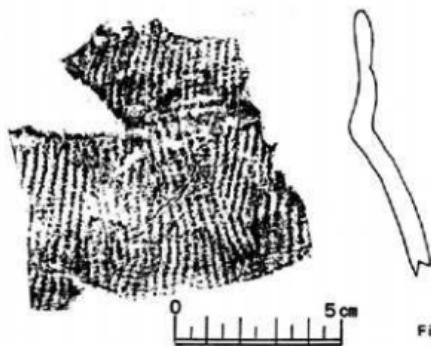


Fig.11 つぼ形の破片

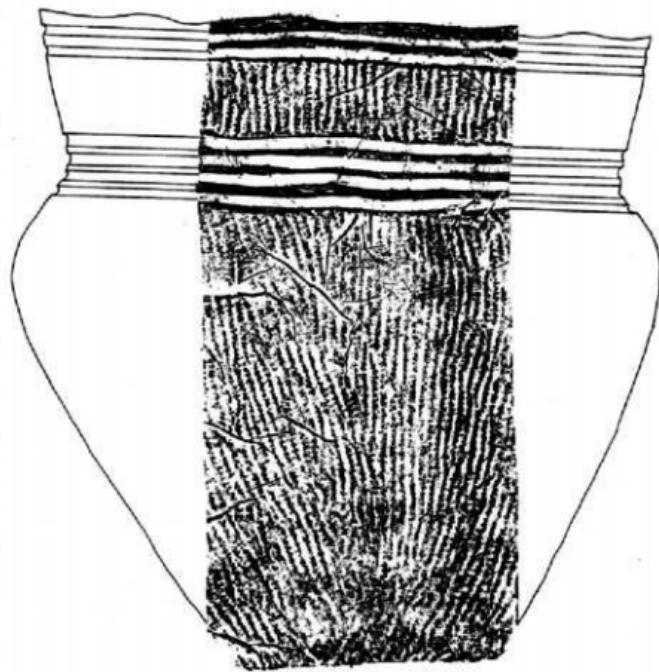


Fig.12 ピット中から出土したつぼ



Fig 1 (b) 道路付近地籍図

担当者はこの道路をみて 万葉東歌にある「にはとりの かつしかわせを にへすとも そのかなしきを とにたてめやも」 「たれぞこの やのとおそふる にふなみに わがせをやりて いはふこのとに」を心に思い浮べた。

第1号遺構

第4号竪穴の北側にあたる 約5.60mほどの区域の遺構をさすが この遺構は その北側を長さ10.5mほどの横で囲まれた 石組のあるピット及びその南側の灰の積もった カマド跡かとも思われる 遺構の2つをさすもので ピットは中にケールン状の石が41個もあり 中には小さい直徑の長い石も多くあった。これらは ピット中に投げこまれたものではなく ある配列性が認められ ピットの方向は 長い方が北西をさし やや長方形で 長辺約1m 短辺約70cmほどであり 深さは中央部の最も深い所で 約30cmあり 北側の横の石の下には 木炭の細かい破片が見られた。ほかにはなんの遺物も見られなかった。これは横の北西拡張区の北西端に見られた 墓と思われる 同じような遺物もない ピットと 方向が同じである。

その南側のカマドと思われる 灰のいっぱいたまつた遺構は 一番最後の日に調らべた。

第3号竪穴

第1号竪穴と同じような 方形の竪穴であるが 周溝は外側の南 西 北 に完全に見られ 東側は不完全であった。床は埋められてはいたが 外側の柱穴の位置にやや特殊性があるようと思われた。南西壁の西隅にカマドがあり カマドと外周の間の床に 半折の鐵器片があった。カマド前は 第1号竪穴と異なり 土器は少しである。また カマドの前に 石圓いの火所もない これもあるいは 二重の周溝を持っていたかもしれないが 内部は埋められ 良く判断できない。

第4号竪穴（第2部の第4号竪穴）

東側の大部分がすでにブルドーザーで砂を取られていたが、その断面と思われるものが砂の崖に表わされていた。この竪穴はいわゆる第2号址の南に接し、深くなかなか遺物が表われない。遺物が表われたのは全て竪穴の中ほどからであり、床面には1つもなかった。しかし周溝はその北側にやや太い1本と西側及び北側に二重のお互いにやや離れたものがあり、きわめて特殊な竪穴である。竪穴というよりは半地下式住居と呼んだ方がよいが、大部分が工事のため失なわれていて残念である。その北側の壁の線は前期の第3号竪穴の北側の壁の線と同じ1線上に並ぶ。

第2号遺構

第3号方形竪穴と第4号方形竪穴の北に、この2竪穴の北壁を約5.60m離れて、1つの櫛と見られるものが約10m以上続いている。周溝状に掘られ、ところどころに長方形の柱状の掘穴が残り、また西の壁は2か所ばかり灰のかたまりで盛り上がった場所があるが、どの建物に所属しているか、良くわからない。

壁の北を削土したところ、竪穴など一切なく、所々に大きな木の横棒と思われるものがあったが、ただ北西側に墓とよく似た形のピットと2個ばかりの柱穴が発見されただけで、遺物は一切無かった。

第5号竪穴

1つの辺約4.5mの方形竪穴で、南東隅の方に灰の積もった場所があり、内側に7本の柱穴があったほか、北西壁ぎわにカラミが発見され、竪穴の床は埋められたらしく、浅い周溝をめぐらす。

第6・7号竪穴

第5号竪穴の南東、わずかに隔てて、第6号と第7号竪穴が発見された。

第7号竪穴は第6号竪穴を拡張したものらしく、特にその第5号竪穴よりの壁はほとんど一致していた。

第6号竪穴は、一辺3mの方形、第7号竪穴は、その南東側に拡張され、一辺5mあり、これも正方形の竪穴で、南東隅にカマドがあった。遺物は第6号竪穴と第7号竪穴の境の壁と、カマドに発見されただけである。第6号竪穴の北東壁に近く、そのほぼ中央部に石をピット中に埋めた遺構が1つあったが、特に石の焼けた痕は見いだされなかった。

獨立柱建物跡

第3号方形竪穴と、第5・第6・第7号方形竪穴の間に主体を置く獨立柱建物、1棟以上が発見され、その柱跡は第3号竪穴におよんでいたが、遺物は発見されず、その確かな時代はわからない。

B 続縄文式土器について

1. 包含層について　柏田遺跡の続縄文式土器は、ほとんど第2号、第3号竪穴東側のすでに工事をされた地點から、表面採集されたものであり、先にも書いたように、土層中に包含されていたものではない。

つまり、続縄文式土器は、調査以前には柏田川の方に寄った場所にあったものであり、また、今回調査した方形竪穴群のあたりにあったとしても、方形竪穴を作る際に、すでにとり壊されていたかも知れない。また、東側柏田川に寄った地點にも、方形竪穴がなかったとは言えないが、ともかく、包含層中に包含されていたものではない。このことは、土器の歴年に重大な支障をもたらす結果になった。

2 製作技法について これは 大きな破片を見なければ詳細はわからないが 内側を横に細かく窓でな形を整えた痕が著しいものと そうでないものがあり 前者は縄文時代晚期の土器の製作技法の一部をそのまま伝えている。縄文だけの胴部破片には 縄文の下か上に 横目が見られるものがあり これだけ見ると これがよく 志藤沢式土器の あるものに似ている。1 2を合わせると 繩年がある程度できるかも知れないが あくまで拾ったものであるから ここでは確かなことを言わないことにする。

3 村越 清氏 福田友之氏 江坂輝弥 伊藤信雄氏 須藤 隆氏⁽¹⁾ 芹沢長介氏⁽²⁾ は 奥羽地方北部の
続縄文式土器について 数種の型式を設定した。⁽³⁾

即ち五所式 宿野辺式 二枚横式 瀬野式 等であるが この他 志藤沢式⁽⁷⁾ 田舎館式⁽⁸⁾ 天王山系式⁽⁹⁾ 土器の土器もある。

このうち 粕田遺跡の土器編年は 主に砂沢式と二枚横式 にあたるものと考えられるが 一部の口縁部に垂直な縄文をつけたものの中には 北海道系の土器も入っていると思われる。

前の分類は 包含土層の順序に分けたものではないから あまり適当とは言われない。別の分類法も成立する。それは 土器の製作技法による分類法である。例えば 縄文のあるなしまたは 土器の内側の粘土の縫目のあるなしによって 別けることも可能である。

この粕田遺跡の土器は 数も少ないし 従って正確には 編年できないことは 前と同じであるが この方法によつてもその早い方から 砂沢式の1部と 五所式の1部と 二枚横式の1部に相当するものであろう。

以上の別の分類法を以つてもこれ以外には 分けることができないと考える。

これには著者が発表したことのある 秋田市の南 四ツ小屋末戸台出土の 土器に1例があり それもこのグループに入るものであろう。

[注]奥羽地方だけでなく 北関東地方でも続縄文式(弥生式と同時期にあたる時代の土器)には 必ず胴体部に縄文があり 無文のものはない。学校の生徒は 教科書のせいであろうが 無文の土器を見て「これは弥生式である」と発言するものが多いが これは 間違いであって 無文の土器は 縄文時代の後期の終わりごろに多い。著者が続縄文式と呼ぶ土器が盛んに東北地方北部で使われたのは ほぼ日本南部の 弥生式の時代にあたることは 上にも書いた通りであるが この時代には 縄文の残る土器が東北地方北部に用いられ その石器も弥生式的ではない。ほとんどそれが発見されないといつても 過言ではない。その為に「続縄文式土器」という言葉を使うのである。

(1) 須藤 隆 土器絶成論「考古学研究」第19巻第4号 昭和48年

(2) 芹沢長介 石器時代の日本 幕 昭和35年

(3) 村越 清 東北北部の縄文式に後続する土器「弘前大学教育学部紀要」 第12巻 第2号 昭和42年

(4) 江坂輝弥・村越 清 下北郡川内町宿野部縄ノ木平遺跡「下北」 昭和42年

(5) 須藤 隆 青森県下北郡大畠町二枚横出土の土器 石器について「考古学雑誌」第56巻第2号 昭和45年

(6) 伊東信雄 稲作の北進「古代の日本」8 東北 昭和45年

(7) 伊東信雄 東北北部の弥生式土器「文化」第24巻第1号 昭和35年

(8) 奥山 潤・安保 彰 十和田湖西南部(小坂鶴山)の弥生式文化とその後続形態(上・下)「考古学雑誌」第49巻第2号 昭和38年

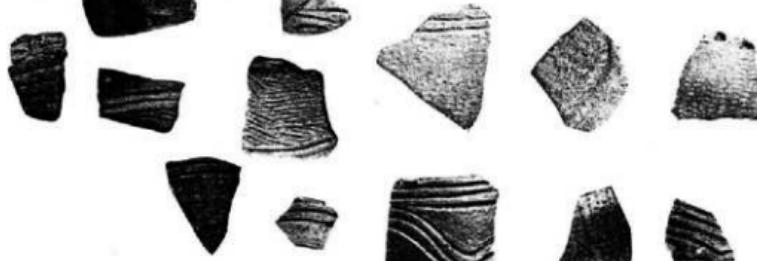
(9) 奥山 潤 秋田市周辺の縄文晩期末及び後続期の遺跡概要「秋田考古学」第49巻第2号 昭和33年



PL 4



PL 5



PL 6



PL 7



PL 8



PL 9



PL 10



PL 11

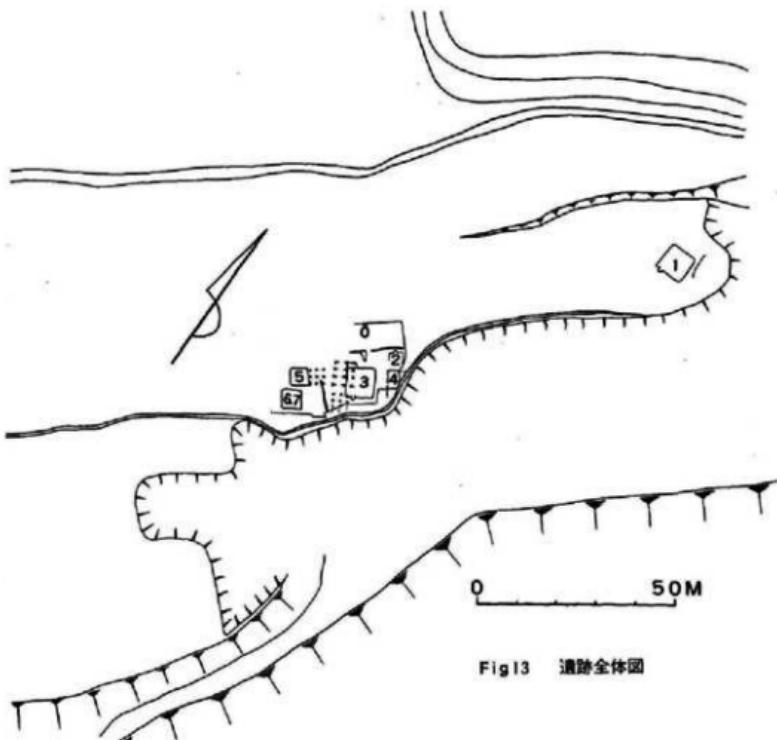


Fig. 13 遺跡全体図

第 2 部

豎 穴 と 土 師 器

5 造構について

1号豎穴 (Fig. 14, PL 14[1]~[3])

昭和48年3月25日より 本格的な発掘作業にとりかかったが 北東部ブルドーザーで剝土された調査区外で 小山純夫氏がフィゴ片を発見 豊穴の一部輪かくを検出し これを1号豎穴とした。豎穴中心軸は南北。調査の結果浅い方形豎穴で 一边約7mである。周溝(外周)の内に 南側の周溝を欠く 一边約5mの周溝(内周)を確認した。外周四隅に 径30~40cm 深さ20~30cmの円柱穴 四辺中央に短軸20~35cm長軸30~40cmの角柱穴が検出され 四隅円柱穴と 四辺中央角柱穴の中央 すなわち各辺の4分の1の周溝内側に15~20cmほどの小角柱穴が検出された。ただし南辺西側4分の1の位置にはカマドがおかれ 小角柱穴は検出されなかった。外周に直接開通する柱穴は以上の15コと思われる。

内周は一边約5mであるが 西側周溝南部は 外周にとりつけられたカマドの前庭部掘り込みがあり検出できなかった。南側周溝はカマド前庭部の掘り込みにより検出されなかったが 南東隅に長さ約50cm 幅約5

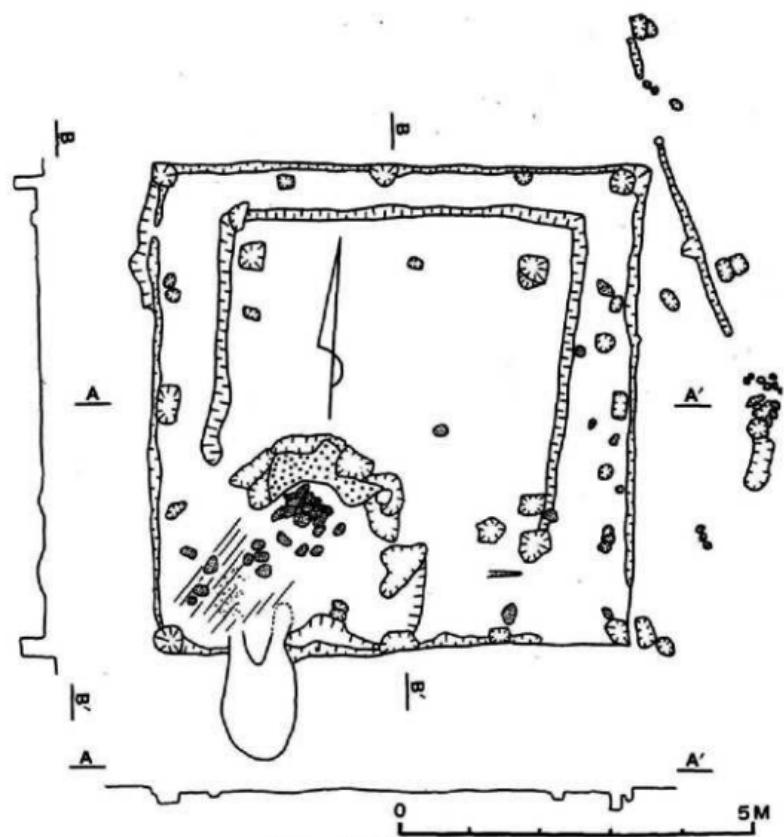


Fig 14 1号竪穴実測図

cmぐらいの東西に走る溝が検出された。これが南側周溝の一部であろうか。内周 北東 北西 開内側に35~40cmの角柱穴が検出されたが、南東隅には同規模の柱穴が3柱検出された。その一つは 東側周溝を切り込んである。南西隅はカマド前部掘り込みにより検出できなかった。

カマド前部掘り込みは (PL 4 [2]) 南西隅に東西約3.8m 南北約2.5m 深さは竪穴床面から約10~15cmに掘り込まれ、北側は掘り込み上縁が大きく曲折する。

カマドは、竪穴南壁西寄り 4分の1の位置に設けられ 周溝を掘り込んだ上に粘土を張る つまり壁を掘り込まずに周溝を埋めて火床をつくっている。構築は粘土だけで 土器 石等の利用はされていない。

床面は 内周溝で囲まれた面及び 内周溝と外周溝の間は同レベルで 一様に平坦である。

この二重の周溝の性格用途がいかなるものかは判断できないが、当地方の冬の気候および冬の生活条件を考えてみる必要がありはしないだろうか。

カマド前部掘り込み床面には 20~30cm大の河原石が置かれ 判然とはしないが 掘り込み北壁とともに焼けていることより 火を使用した跡で 炉ではないかと考えられる。

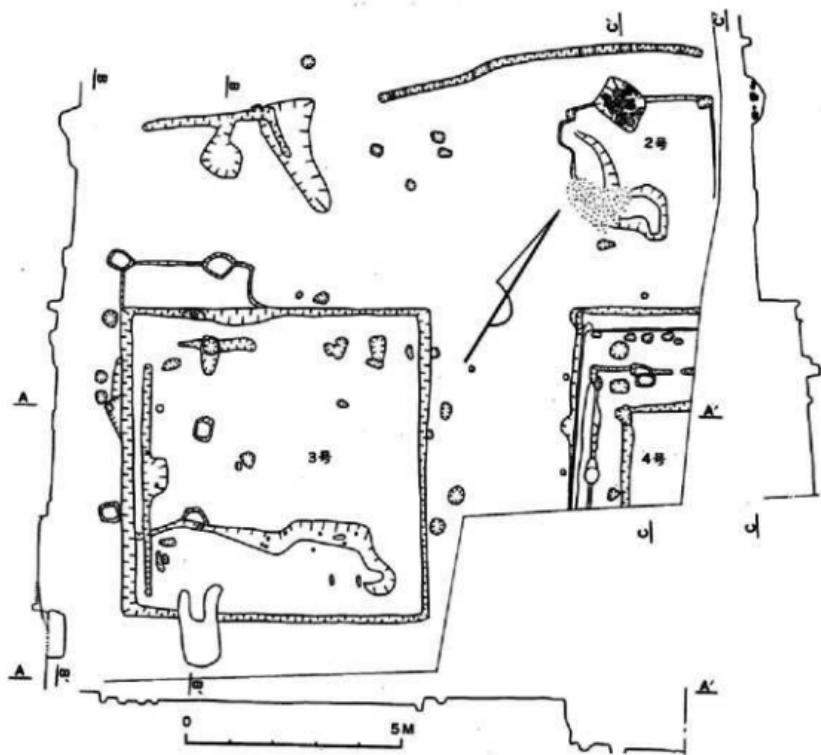


Fig. 15 2・3・4号 穴実測図

2号壁穴 (Fig. 15)

一辺約3.5mの浅い方形壁穴で南北中心軸はN-35°Wである。北壁及び東西の北側壁は確認できたが南側半分の壁は検出できなかった。北東・北西隅に30~40cmの掘立柱穴が見られ、南西部にも同等の掘立柱穴が1個検出された。壁穴南壁はこの掘立柱穴より推定した。北壁中央部に1×0.7m 深さ40cmほどの平面長方形 断面すり鉢形のピットが検出され(PL15) ピット内には20~30cm大の河原石が検出された。東壁南壁 壁穴内外に焼土が広範囲に検出され カマドと判断できる 鑿著な形はみられなかったがこの焼土下に南北が方形 1.3m×1.3mほどの浅い掘り込みが検出され 1号壁穴 3号壁穴同様カマド前庭部掘り込みと思われることにより 一応カマドの崩壊したものとみた。遺物は焼土中より Fig. 18(b)-3・4・5の甕が倒立した状態で出土した。北側ピット内からの出土遺物はなかった。

3号壁穴 (Fig. 15, PL16[1]~[7])

7m×7mの方形壁立て 南北中心軸はN-33°Wである。壁穴内西側には西壁に平行に1号壁穴同様もう1本の溝が検出された。

カマドは南壁の4分の1の位置西側におかれ 1号壁穴同様 カマド前には掘り込みがある。(PL16[2])

[3] [6]) 1号竪穴の前庭部掘り込みは ゆがんではいるが 一応方形に近かったのにくらべると 3号竪穴のそれは $6\text{m} \times 2\text{m}$ と長方形である。1号竪穴では石組がみられたが 3号竪穴にはみられず 掘り込み端に 平行する $25\text{cm} \times 10\text{cm}$ の楕円形ピットと そのピットの間の床面が焼けている遺構が検出された。

北壁西側に $3\text{m} \times 1\text{m}$ の張り出し部がみられた(PL16[5])西壁中央部にわずかでのあるが 他の竪穴のコーナーが突出され 柱穴がその隅に1個みられた。この竪穴は周溝をもたず 竪穴隅に柱穴がみられる事により 2号竪穴と同様のものと思われる。3号竪穴検出時においてこの竪穴隅につながる竪穴の平面プランを検出できなかったことより 3号竪穴は この竪穴を切り込んでつくられたものであろう。

柱穴は竪穴内及び周辺から29個検出されたが 大きな角柱掘立柱は 後時の角柱掘立柱のものである。

4号竪穴 (Fig15, PL17[1] [2])

2号竪穴の南にあり その北壁が 3号竪穴北壁の延長線上に並ぶ 他の竪穴と比べかなり深く 半地下式の呼び方が妥当であろう。南半分がすでにブルドーザーにより崩壊されており 全容を知ることはできなかつた。

現況 東西約 3m 南北約 4.5m 深さ約 1.1m 北壁掘り込み外に1つ 西壁掘り込み外に2つ 径約 10cm ほどの掘立柱穴が検出された。北西隅には半月状の切れ込みが2段検出された。周溝は3重にめぐらされ きわめて特殊な形態である。

5号竪穴 (Fig16, PL18[1])

$4.5\text{m} \times 4.5\text{m}$ の方形プランで 幅約 10cm ほどの浅い周溝があげられ 竪穴掘り込みも浅い。竪穴中心軸は N- 34° -W である。

柱穴は四隅と北 西壁に径 $25\sim30\text{cm}$ 大の円柱掘立柱穴 東壁中央に 20cm の角柱掘立柱穴が検出され 計7本が主柱であったことが確認された。南壁の中央やや東寄りに焼土が検出され 床面東南部中央には東に向く馬蹄形の焼土が検出された。

6・7号竪穴 (Fig16, PL18[2])

重複した竪穴であり 先行する竪穴を6号 後の竪穴を7号とした。

6号は一辺約 3m 四隅に角柱掘立柱をもつ方形竪穴で 竪穴中心軸は N- 40° -W である。7号は6号の北西に拡張したもので 一辺約 4.5m の方形で 竪穴中心軸は N- 30° -W である。後に北 東をわずかではあるが二次拡張している。7号は四隅に $30\sim50\text{cm}$ の掘り方をもち $20\sim25\text{cm}$ の柱痕を残す角柱が主柱で 各主柱間に北で4本 西で3本 南で2本 東で3本の 計12本の円柱掘立柱を配すが 二次拡張により北側には6本の円柱掘立柱穴が検出され 東には 中央やや南側に主柱と同程度の角柱掘立柱を置く。北側の6本の円柱掘立柱穴に 一時にすべての柱をたてたものかは不明である。東壁南半の 東壁中央と東南隅の角柱掘立柱の間は 広く平坦面がとられ 比較的床面もしっかりしており 出入口と思われる。

円・角柱掘立柱建物 (Fig16, PL19[1]~[4])

円柱掘立柱建物は 柱間5尺の2間×2間の建物で 建物自体の規模にくらべると 径 $40\sim50\text{cm}$ の円柱は堅面なものであろう。主軸の方向は N- 35° -W である。

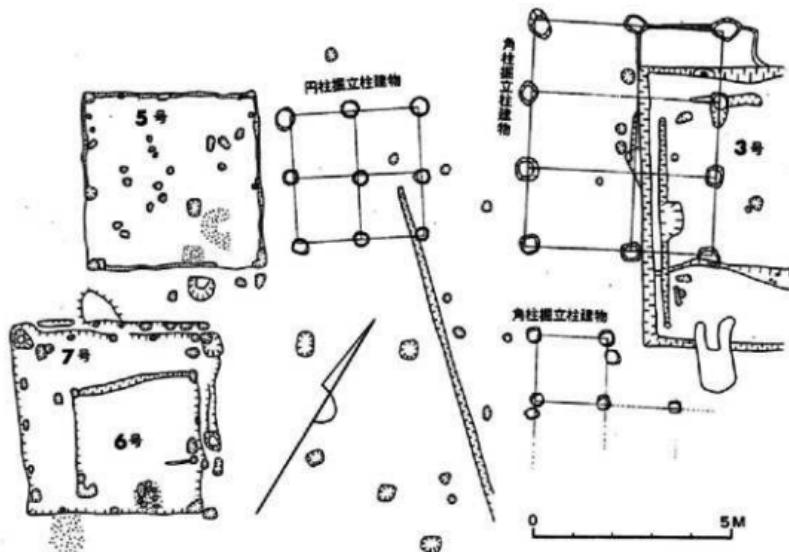


Fig. 16 5・6・7号竪穴・角柱据立柱建物実測図

角柱据立柱建物は 衍行3間 梁間2間で 間尺は衍行が北より5 6 6尺 梁間は東より7 9尺である。3号竪穴を切り込んでおり 時期は竪穴群より遅れる。角柱の大きさは 30~45cmほどで 円柱据立柱建物同様 建物の規模に比べて堅固なものであろう。東あるいは西面する建物と思われ 主軸の方向はN-30°-Wであり 円柱据立柱建物とは異なり また建物中軸線も一致しない。

3号竪穴南西隅に約30cmほどの角柱据立柱穴が5コ検出され それらは間尺約5尺で互いに連絡することができた。東部 南部の確認拡張調査ができなかったので どのような建物になるのかは不明である。なお 円柱 角柱の違いはあるが 柱の規模は 円柱据立柱建物に類似する。

溝 通 構 (Fig. 15・16)

2号竪穴の北側 (I溝) 3号竪穴北側 (II溝) 3号 5 6 7号間 (III溝) にみられた。

I溝は東西に走る溝で 長さ約8m 幅約20cmで 溝内の8本の角柱据立柱穴を検出することができた。II溝はI溝の西約2.5mはなれて検出され その東には 1m×2.5mほどの平面三角形に近いピットが掘り込まれていた。II溝の長さは約3mで 東端部に20cmほどの角柱据立柱穴が検出された。

III溝は円柱据立柱建物の南東柱穴によって切り込まれており 円柱据立柱建物に先行する通構である。現全長約9mあり N-47°-Wの方向である。

6 出土遺物について

本遺跡から出土した遺物の中で 量的にもっとも多かったのは 土師器であり その大半は壊破片であった。完形もしくは 形体の判明するものは少なかったが 壊口縁部破片が多量に出土し その形状より次の六類に分けることができた。なお表掲の遺物はページ数の都合上省略した。

I類 (Fig17(b)1~4, PL20-3, 4, 5)

比較的小型の壊で 沈線で口縁部と体部を分けるもの。沈線をめぐらした後 体部を下から上にへら削りを行い その残溜粘土が沈線に埋まっている。Fig17(b)-4は口縁が大きく開き くびれ部に沈線を二条めぐらし その沈線間断面は直線である。

II類 (Fig17(b)5~9, Fig17(c)-1, PL20-2, PL21)

大型の壊で I類Fig17(b)-4の二条の沈線がとれて 口縁部が「〔」状になるものである。Fig17(b)-5~PL21-1は底立ち上り部までの復原ができる 現高約28.5cmである。Fig17(b)-5~6に比べ Fig17(b)-7~8~9 Fig17(c)-1はくびれの直線部分が長くなる。

すべて巻き上げにより 粘土紐の幅は1.5~1.7cm 体部は下から上にへら削りが行なわれ 内面にハケ目痕がみられる。Fig17(b)-6の内面は 胎土上に第二次粘土をはって内面化粧を行なっている。その下にハケ目痕があり ハケ目痕は化粧粘土を器壁にはりつけやすくする働きもあるのではないだろうか。

III類

もっとも数的に多く 各所より普遍的に出土した 口縁部形態である。

すなわち口縁部がゆるやかな曲線を描き外へ開くもので これは大小さまざまな壊の口縁にみられる。ここでは壊の大小によって二分した。

III-a

大型の壊の口縁で 卷上げ痕を明瞭に残し 内面には全体にまんべんなくハケ目がほどこされており 外面は 体部の下から上へへら削りを行なっている。Fig17(c)-7は 口径約19cmである。

III-a'

部分的に口縁が直線的に立ち上り 頸部の曲線がそれほど明瞭ではないが 出土土器のうちもっとも大型の壊である。Fig19(d)-16・PL26は口径約20cm 高さ約28cm 底径8.5cm 体部最大径約21cm。

III-b

小型の壊の口縁で 口径と体部最大径が同等あるいは わずかに体部最大径が大きい。焼成はあまりよくない 内面口縁部だけにハケ目 横目をほどこす。

IV類

III類について多かったもので 口唇を指ではさみこみ 横になでて整えたもので 口唇先端が他のものにくらべ尖くなっている。成形は巻き上げによるが粗雑なものが多く 焼成もありよくない。口縁部が直上するものと わずかに曲線を描くものがある。小形の壊口縁部である。

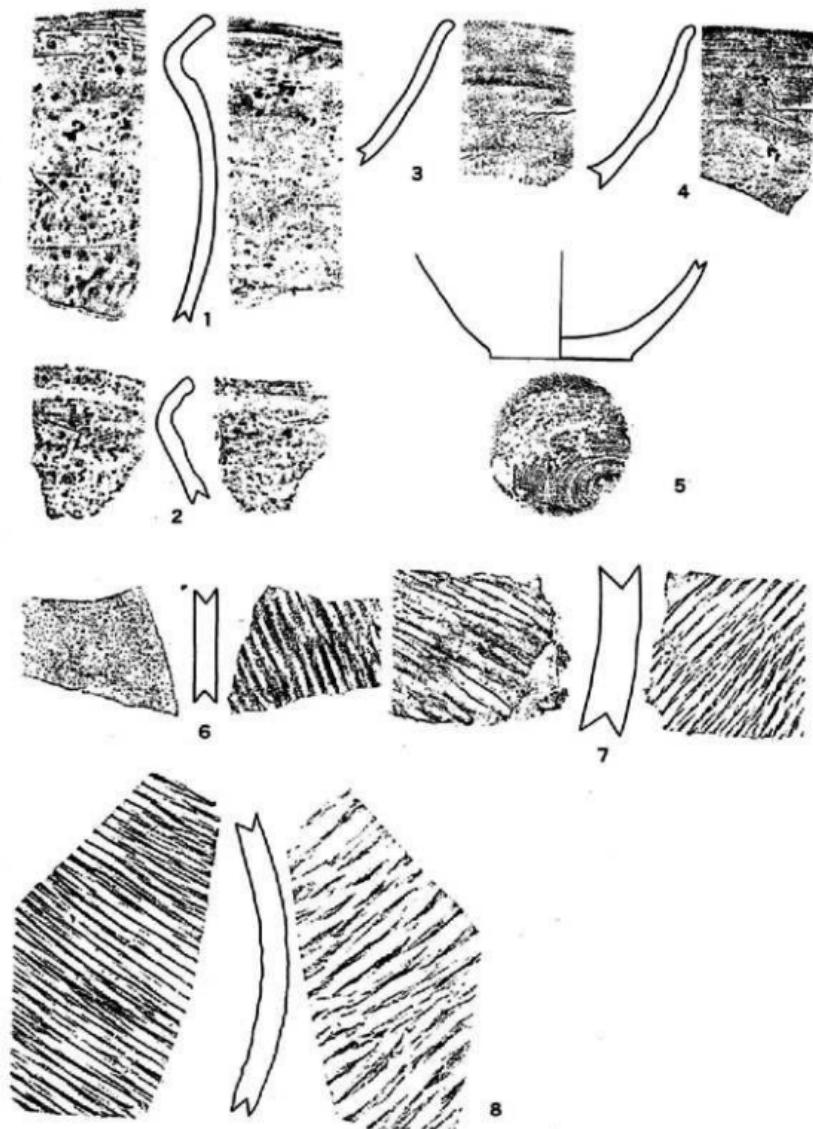


Fig 17(a) 1号竖穴黑色土内出土土器 (1/2大)

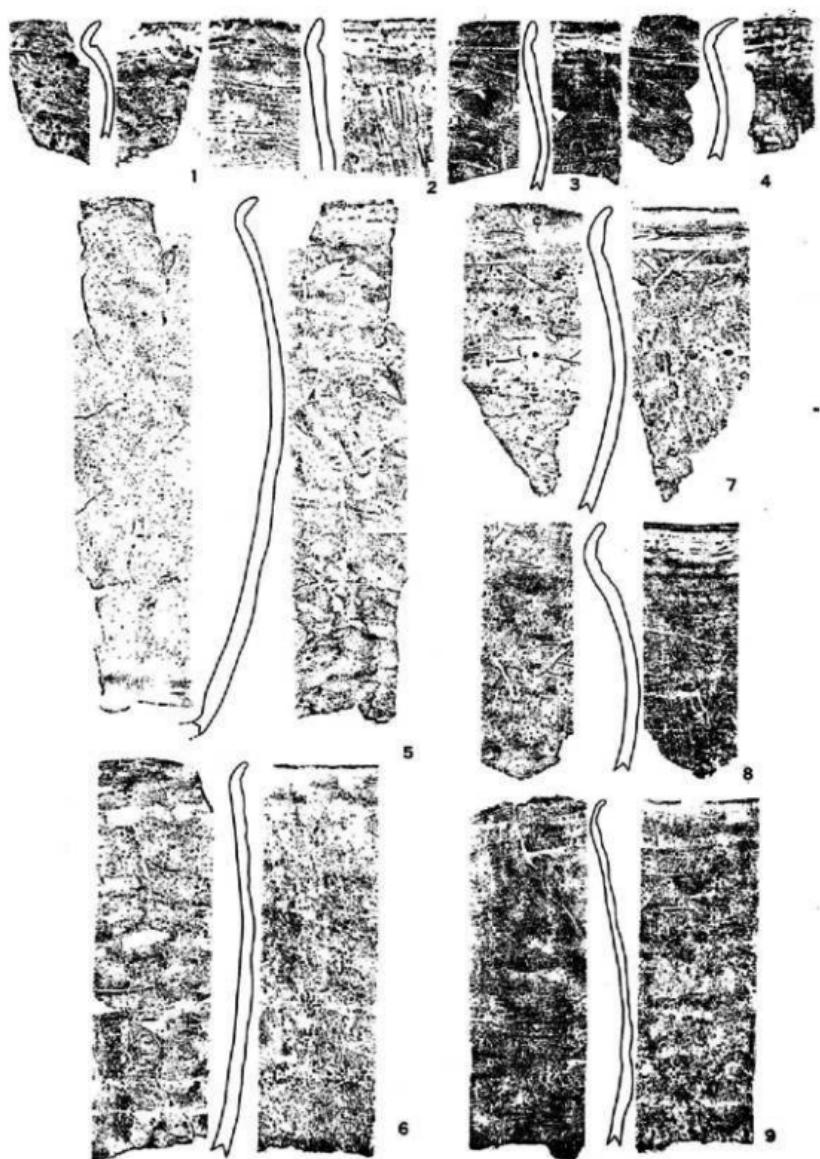


Fig 17(b) 1号竪穴カマド前庭部出土土器 (1/2大)

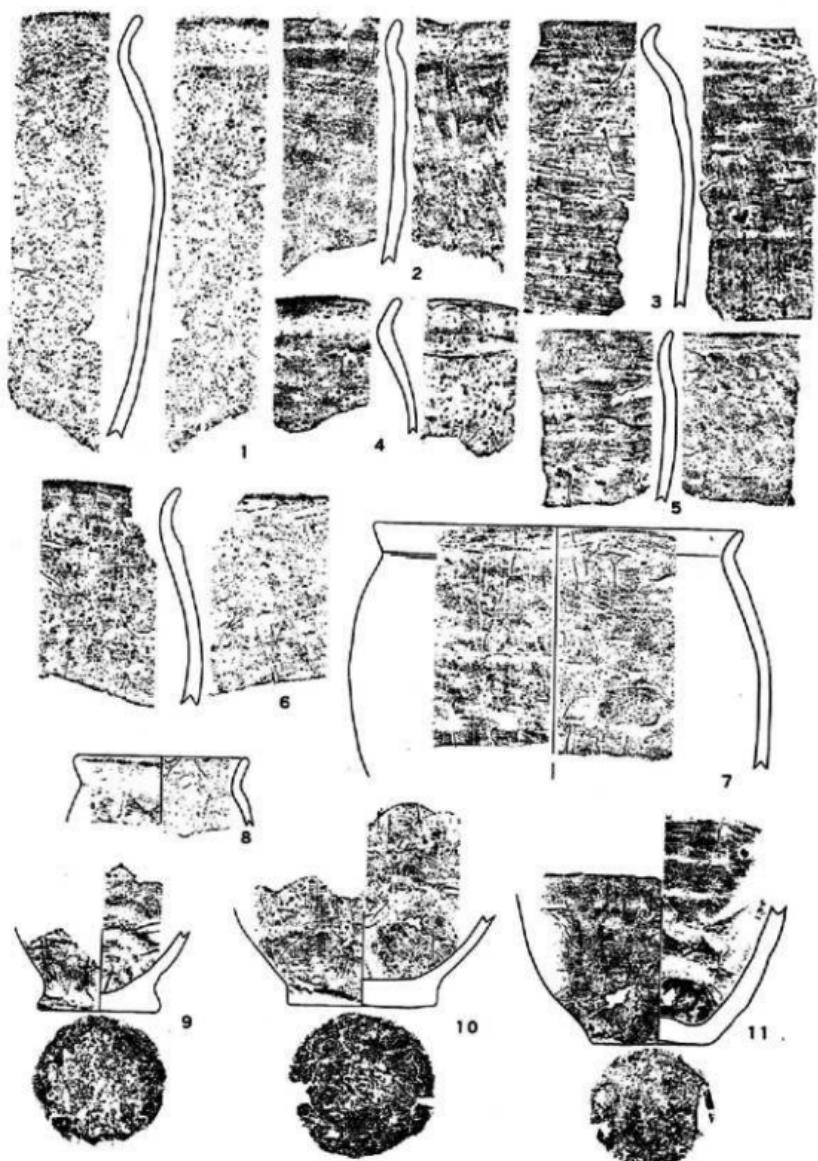


Fig 17(c) 1号竪穴カマド前庭部出土土器 (×大)

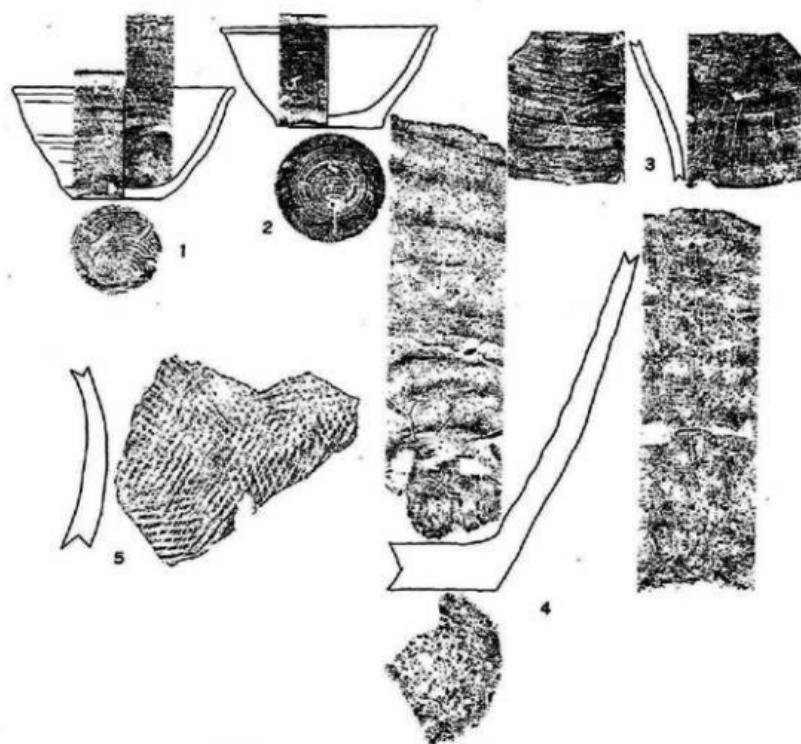


Fig 17(d) 1号竪穴カマド前庭部出土土器 (1/2大)

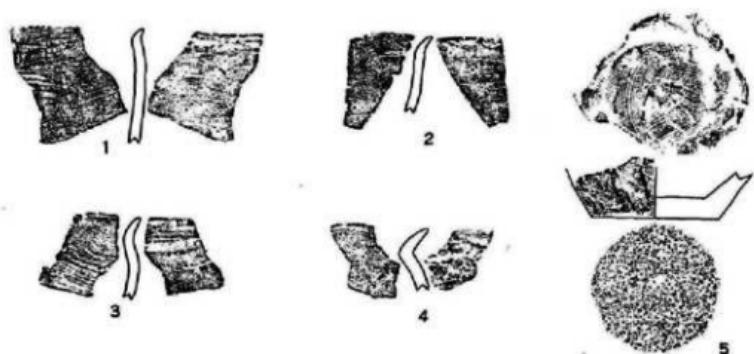


Fig 18(a) 2号竪穴内出土土器 (1/2大)

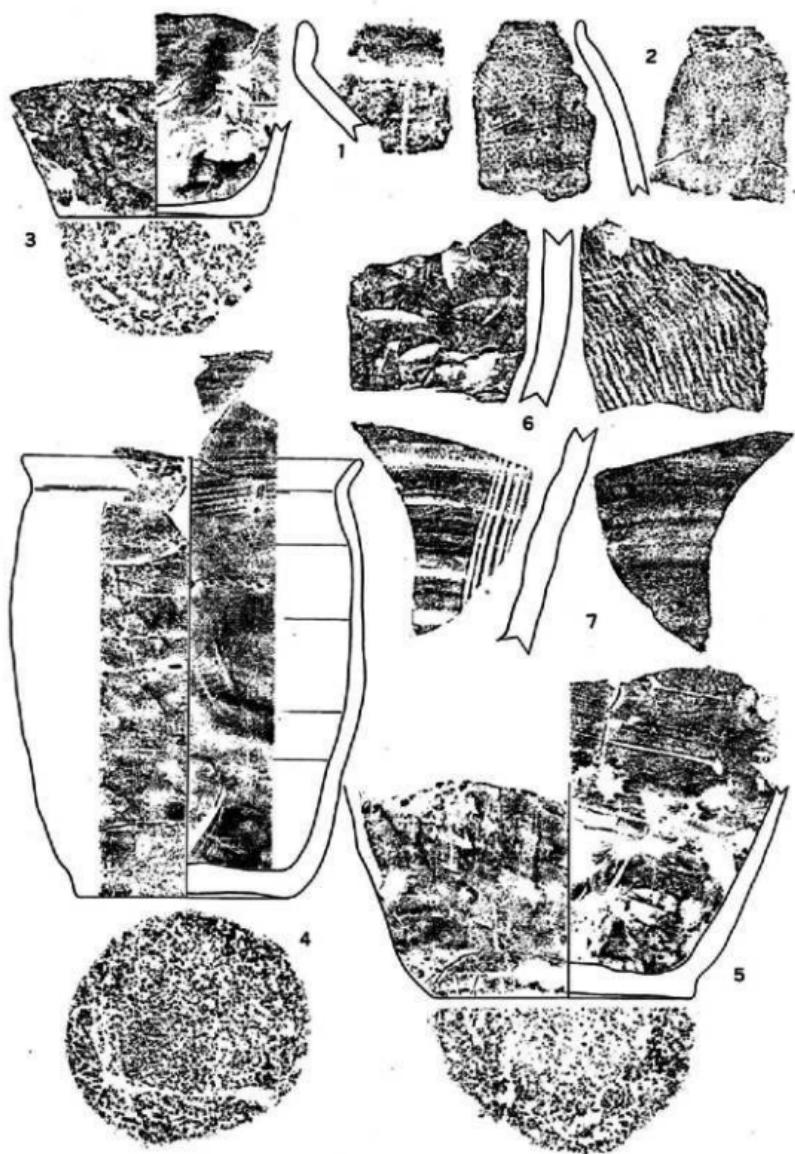


Fig 18(b) 2号竖穴及花土内出土土器 (1/2大)

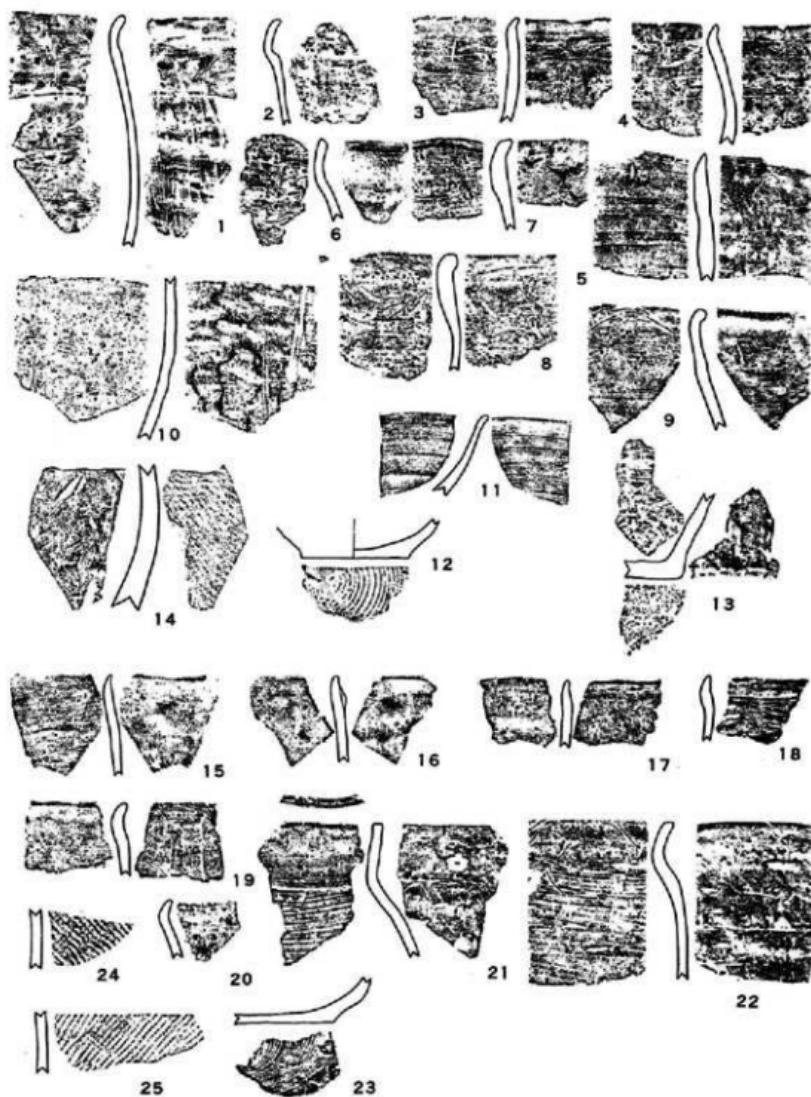


Fig 19(a) 3号竪穴外覆土 (1~13)・3号竪穴上覆土内 (14~23) 出土土器 (1/4大)

V類 (Fig 19(a)-7 8 9)

口縁上端がふくらみ 口唇を平らにするという他にない特徴がある。胎土は粗砂粒を含み 焼成もあまり。

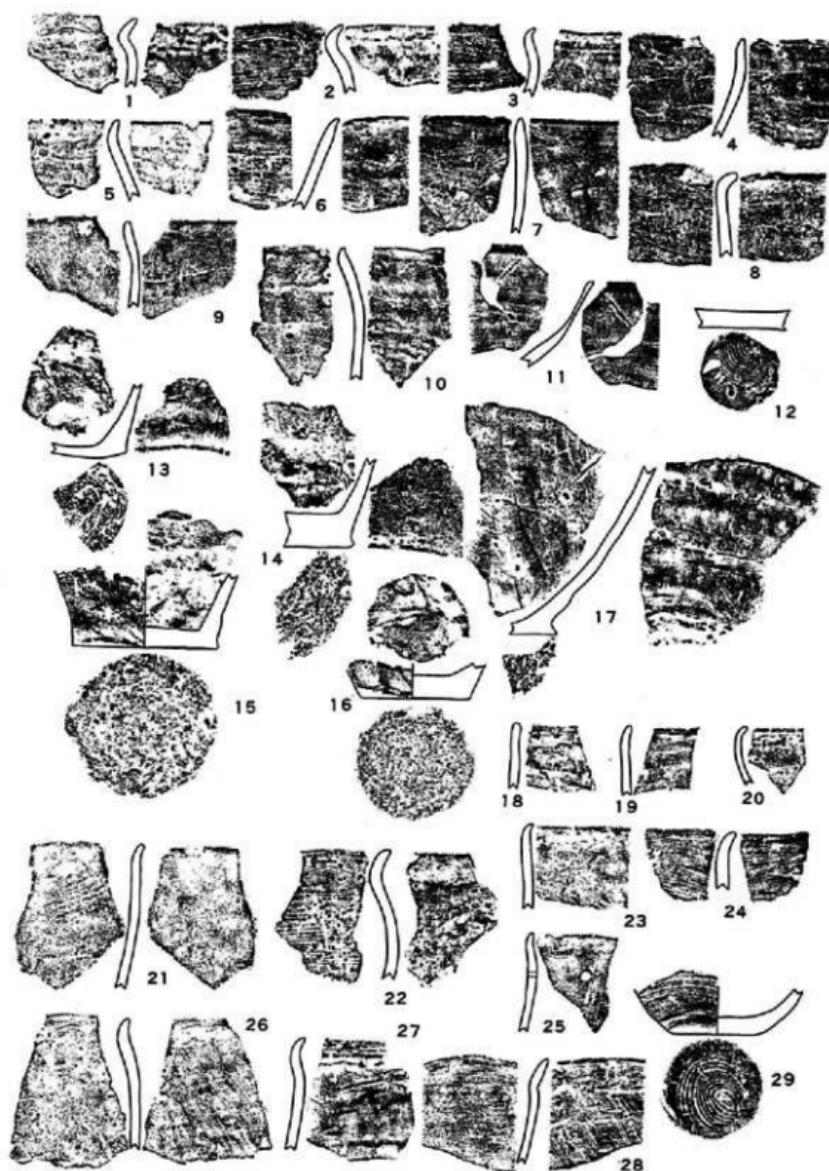


Fig 19(b) 3・5号竖穴間地山直上。3号竖穴南側2号竖穴同様(18~28)出土土器(大)

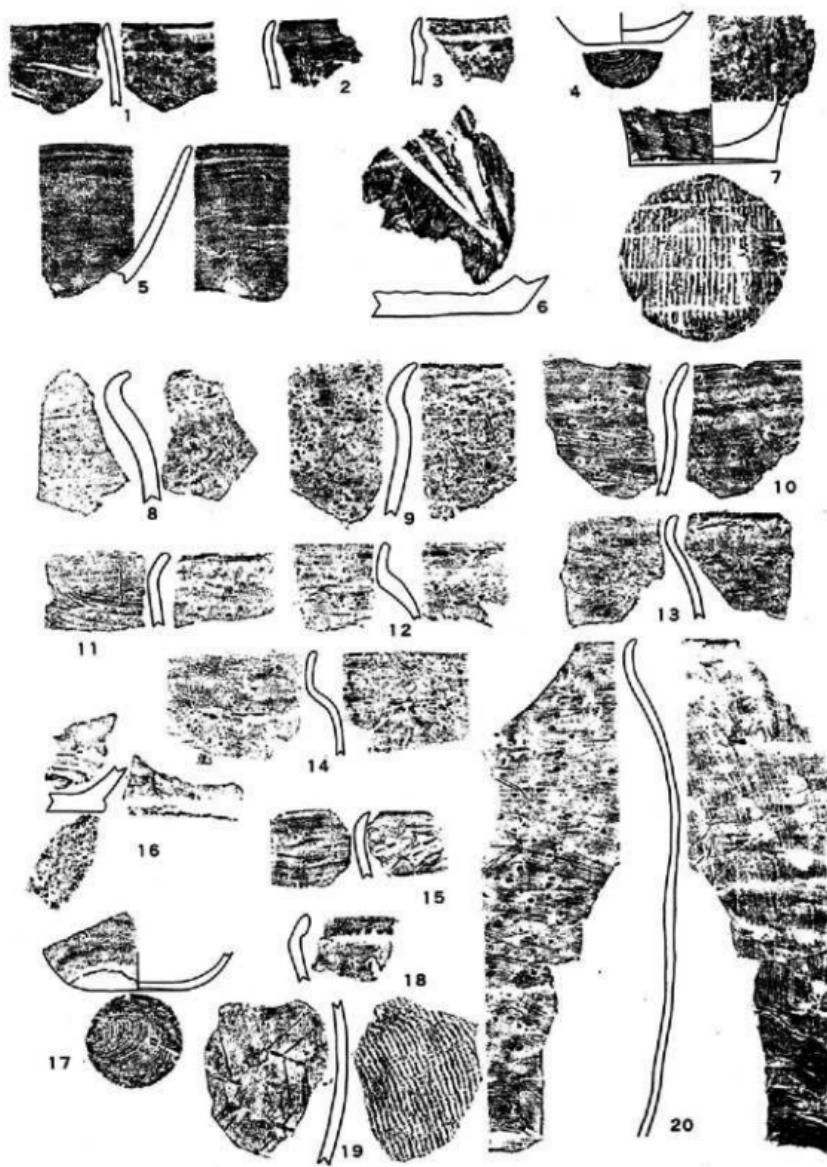


Fig 19(c) 3号竖穴内上位(1~7)・中位(8~17)・床面(18~20)出土土器 (×大)

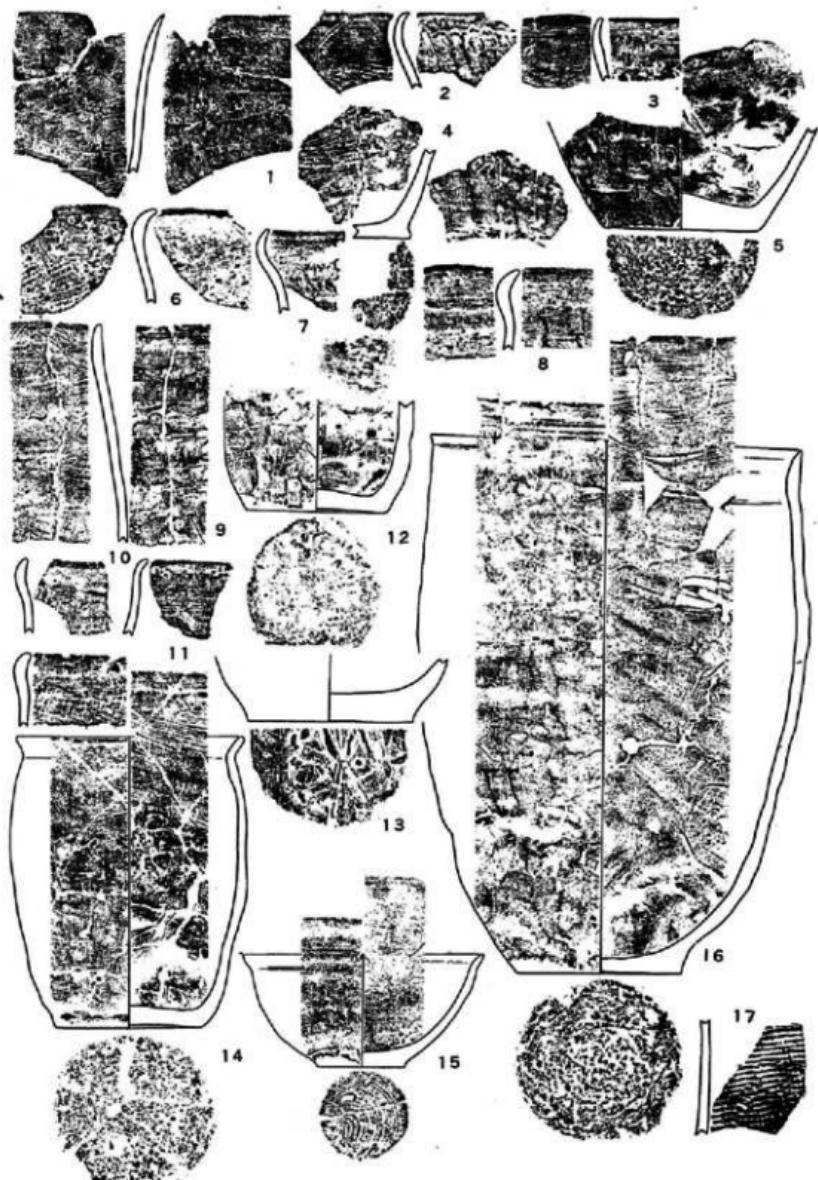


Fig 19(d) 3号竪穴カマド上(1～5)・カマド前底部(6～17)出土土器(×大)

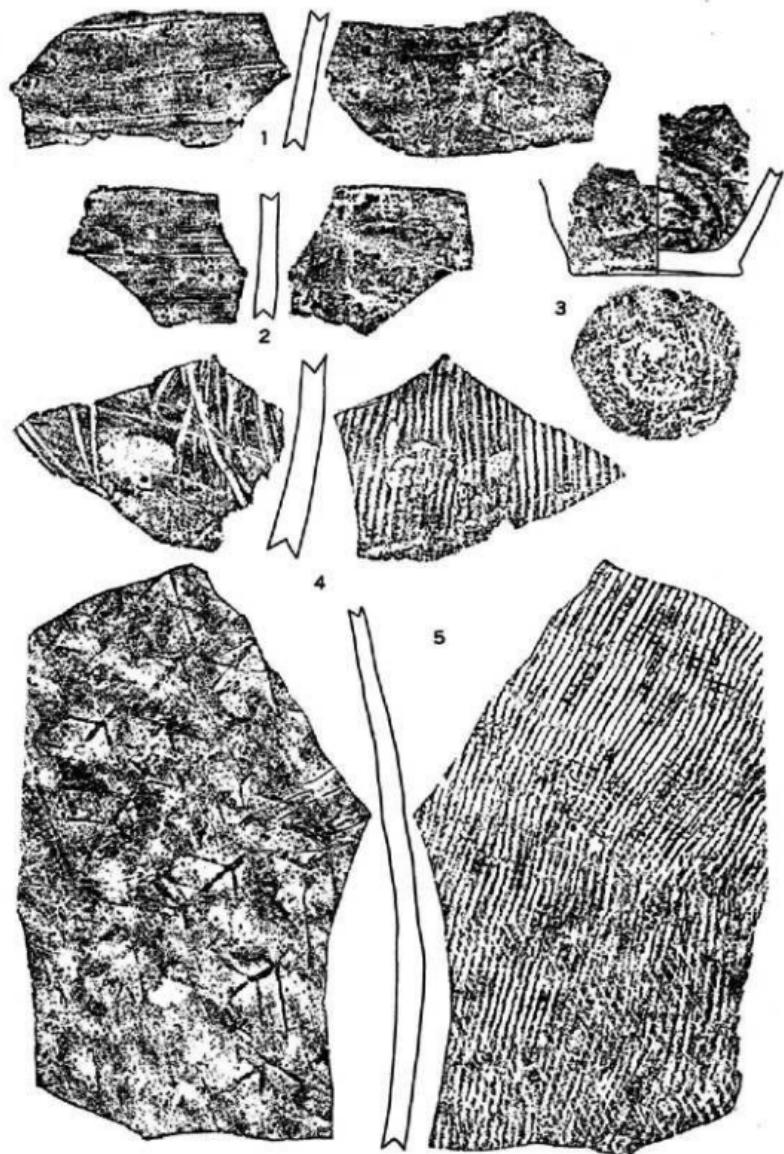


Fig 20 4号竪穴内出土土器 (1/大)

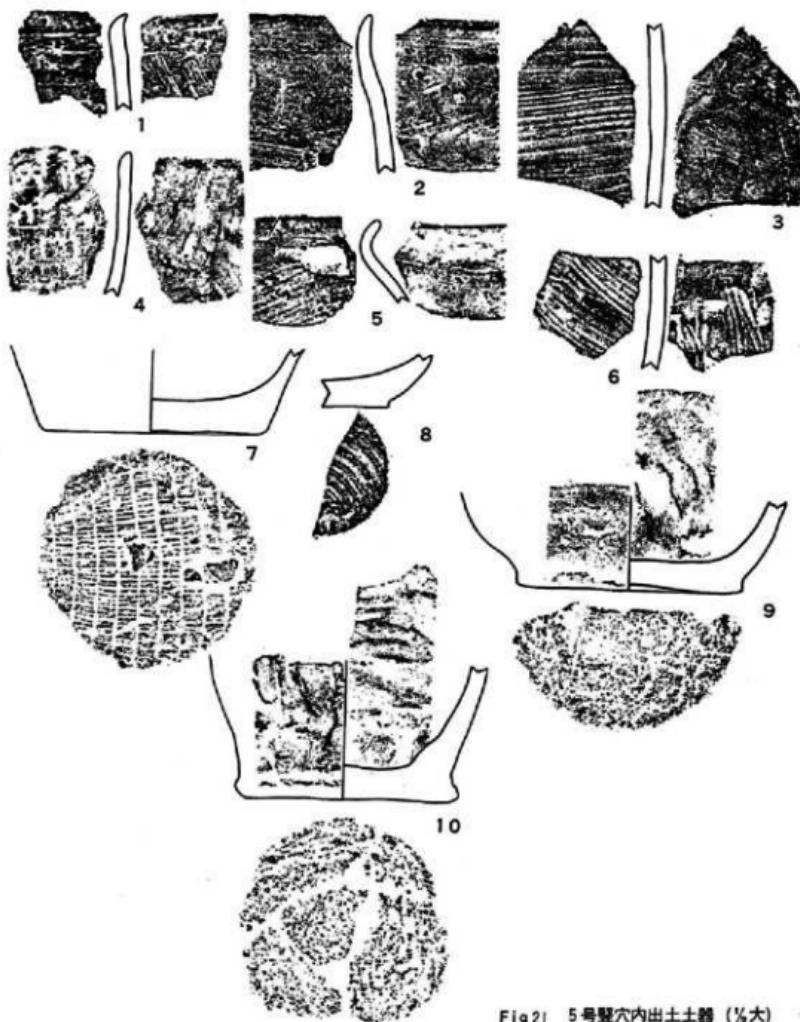


Fig 21 5号墳穴内出土土器 (1/2大)

V類

V類の口縁部上端のふくらみがなくなり 口唇は平らであるが 口縁部がゆるやかな「う」型を描き 口縁部というよりも 頭という方が妥当と思われる形になる。

Fig 19(c)~14は粗製であるが Fig 19(a)~21 22は制作 整形法がまったく同じである。すなわち 外面は口縁部は横ナデ 体部は下から上へのヘラ削り 内面は口縁部横ナデ 体部櫛目である。この櫛目も櫛状のものではなく 木口でこすったような状態である。

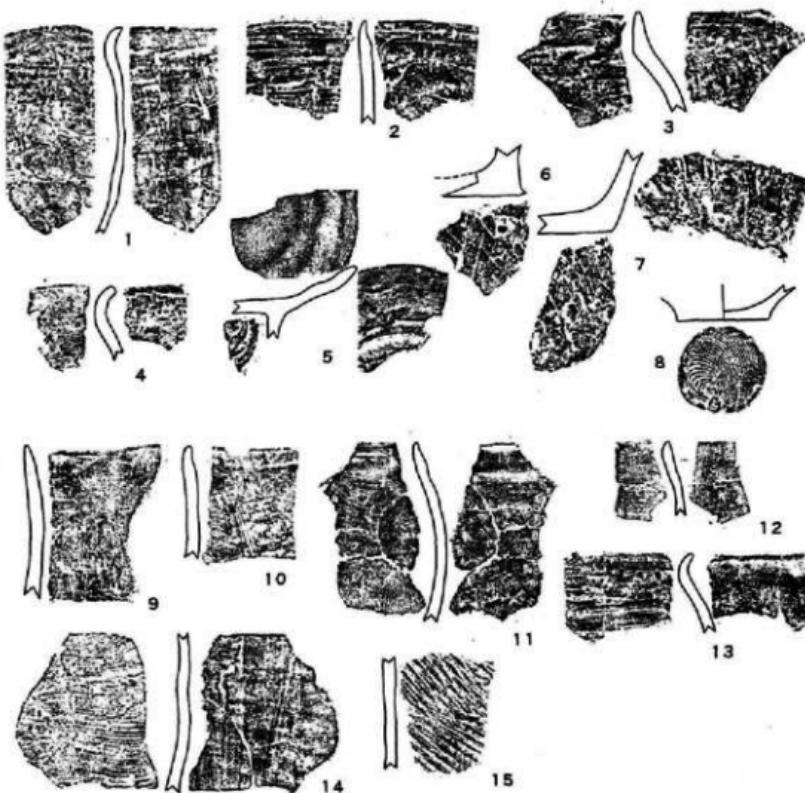


Fig 22 6号竪穴内出土土器 (1/4大)

塊

塊は各遺構より出土したが 内黒焼が多くみられた。すべてロクロ成形で 底部に糸切り痕を残し 右回転ロクロが主である。中に糸切り技法により 切り離した後 底縁部をヘラで整形したものがある。(Fig17(d)-2・PL24-2)

底部

出土した底部の大半は 底面に小砂利を付着させた 当地方の土師器底面に普遍的にみられる種類のものである。その形態は 底面からの立ち上りが 底縁からまっすぐ上るもの ゆるやかな内湾曲線を描くもの 体下部と 底部を分けるようにするどく切れ込むような形を呈するものである。その他特色は 底面に織物痕を有する底部の出土であろう。小砂利を付着させている底部よりは 肌土に砂粒も含まず 焼成も良く 底縁から上へのヘラ削り痕が明瞭である。 (Fig19(c)-7・PL27-1, Fig21-7・PL28-2)

高坏 (Fig22-5・PL29-7)

高坏と呼んだが 高台付皿と呼ぶほうが妥当かもしれない。体部と 脚あるいは台部は貼り付けで 内面は内墨で暗文があり 外面は ハケ目痕の上に化粧粘土がほどこされている。胎土には他より砂粒も少なく 烧成も良好であるが 化粧粘土の整形が難で 凹凸がはげしい。

須恵器

当地方で普遍的にみられる 壊破片で 外文は 網目のローラおよび印きにより施文され 内面には画木のあるものとないものがある。

壺鉢 (Fig18(b)-7)

巻き上げの後口クロ成形しており 現況で口クロ目と直角に口縁部から底部へ五条の平行刻文が施こされている。須恵器よりは重量は軽く 烧成はさわめて須恵器に類似する。近年当地方において このようなさわめて須恵器に似た遺物の出土が 中世館城跡を中心にみられる。いわゆる珠洲焼といわれるものではあるまいか。

鑿 口

表面調査によって 遺跡ののる台地全体に散布することがわかった。全容を知るに足るものはない。破片は外径 6 ~ 8 cm の円筒で 径 3.5 ~ 4 cm ほどの孔が貫通する。

鉄 製 品

3号跡南西隅より現長10cm 幅3cm 峰幅0.5cmの片刃の鉄器が出土した。

切先は 刃部が反り上るのでなく 刃部は直線で 峰部が曲線を描きながら刃部へつながるという鉄器である。

7 考 察

第1部の続繩文土器については すでに述べたとおり 出土土器が全部表採の破片であり その包含層もまったくこわされていたので ここではその編年を正しく言うことができないが だいたい奥羽地方続繩文土器の初期から 中期にあたるものと考えられる。初期のものとしては 繩文晚期最終末の砂沢式（大洞A式にあたる）で Fig3 Fig4の1 2 4 5 6 8 12あたり Fig5の5 13 Fig6の12 Fig7の6 Fig8あたりがこれに相当する。

津軽地方では 五所式 下北半島では 宿野部式 濑野式及び二枚模式などは 同期の土器で 稲田遺跡出土土器の場合 上記の砂沢式の新しい方 五所式の1部 その次の二枚模式の1部に近いものであろう。

ただし 二枚模式→宿野部式→瀬野式→五所式の順序に 東から西に向って分布し 稲田遺跡の場合 そのもっとも近いものは やはり津軽地方を中心とした 続繩文土器と似るというべきであろう。

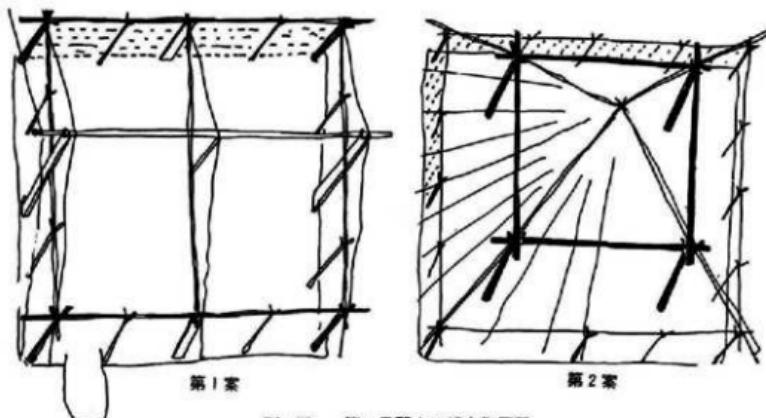


Fig. 23 第1号竖穴の想定復原図

ただし 蓋がわずかながら 発見されることは 宮城県の山王遺跡や 南小泉遺跡出土の土器と似たものがある。

また Fig. 6 の 2・3 のような土器は 秋田県の志摩沢式に近く Fig. 5 の 14・15 などは青森県の田舎館式の新しい方に属し Fig. 6 の 13 などは より新しい続綱文土器であろう。

天王山式や 田舎館式の古い形に共通する土器は 少ないようである。

いずれにせよ 本県はもちろん 北秋田地方でもこれと近似の土器は 初めての発見である。

ピットの底近くに ふせてあったつぼについては その口縁部に 他の土器と少しちがったところがあるが これは二枚桶式の一種であろう。ただし全体の形は恵山式に似た点も多い。

第2部の 須恵器や土師器を出土した方形竖穴群については これも全部を掘ったわけではなく したがって そのグループ的な分布については 柱が丸柱ではなく やや長方形で 大きな木を割って作ったと見られる点からも ずっと後世のものであろう。

Fig. 23 は 永井氏による緊急の想定図で 第1号竖穴の復原図であるが 同氏の御意見によれば 掘立柱が 第1号竖穴でも重合している点から見ても これらの竖穴は中世のものらしい。

第1号竖穴については Fig. 23 の第1案(左)と第2案(右)の2つが考えられるが 第1案は 内側の小さい竖穴を拡張した 二重遺跡であるらしいという考え方 内部柱のうち 南西隅に柱穴が発見されないとすれば この考え方有力になる。

もしも そうであれば 拡張後のプランについては 第1案のような構造が考えられる。8本の主柱と8本の間柱 及びそれをとりまく壁(土壁またはカヤ壁)による構造で 鹿児中学校校庭の「くるみだて」遺跡のものと 親近性をもつ。

第2案は すべての柱穴を 同じ時期とする考え方のもので 西南隅は内部柱がないのが気にかかるが この位置にあるものとすると 第2案のような構造が想定される。

外側の周溝は壁の掘穴を見る。この場合 内側の溝の機能はよくわからない。

屋根はカヤブキなどであると想定されるが サスを用いれば 入母屋造りも可能である。しかし宝形(四

柱)と見るのが妥当であろう。これらに似た堅穴は 岩木山麓で発見されたこともあり また第2号の堅穴は 部分であるから その全体の想像は困難であるが 同じような堅穴が岩木山麓で発見されたことがあり 第1号堅穴よりは 発達したものであろう。

また 各々の堅穴にはいくつかの集団があったと思われるが 全部発掘したわけではないので これも不明である。また各種堅穴は ほぼ一列に並び その向う側には 別の家並みがあって その間に街路があったとも推定されるが これも発掘によらなければわからない。

第2号堅穴北と第6号堅穴の配石をともなったピットについては 何しろ遺物が1つも発見されていないので その性格は不明である。

これら堅穴の造られた時代はもちろん 中世であろう。ただし そのはっきりした時期を言えるまでには 北奥羽の考古学は発掘経験に乏しい。

各堅穴から出土した土器については 須恵器の場合 遠方から運んだものでなく わりあり近くに窯があったものであろう。土師器については その型式について論ずるところがある。

	Fig番号	I類	II類	III-a類	III-b類	IV類	V類	VI類	底小砂利	底アンペラ	底ヘラ	堆	内黒地	高环	須恵器	珠飾器
1号 黒色土	17-a			○	○								3			
1号カマド前底部	17b-d	○	○	○	○				○			1	1	○		
2号 内	18-a			○	○				○			1				
2号 線土 内	18-b			○	○				○					○	○	
3号 外 線土	19-a		○		○	○			○			2	1	○		
3号 上 線土	19-b			○	○			○				1		○		
3・5号間シラス面上	19-b			○	○			○				1	1			
3号南2号同様	19-b			○	○							1				
3号 内 上 位	19-c				○				○	○			2			
3号 内 中 位	19-c		○	○	○	○	○	○				1		○		
3号 床 面 上	19-c	○														
3号カマド上	19-d				○				○	○						
3号カマド前底部	19-d			○		○			○			1				
4号 内	20								○					○		
5号 内	21			○	○				○	○	○	1				
6号 内	22		○	○	○							1	○			
6号カマド上	22			○	○									○		

発掘調査により出土した遺物の中で その主たるものは III IV類に分けた 口縁と それに結びつくと思われる小砂利を付着させた底部(完形である例はそうである)によって 復原出来る變形土器 及び糸切り痕をもつ壇であろう。

I～II類口縁部は1号堅穴だけにみられ 3 4 5 6号堅穴ではみられない。

壇と底部に小砂利の付着する壇は全跡より出土しており時代的差は感じられない。注目すべきは底部に織物痕をもつ壇および 珠洲焼と思われる擂鉢が出土したことであろう。底部に織物痕をもつ壇は 当地方では初見であるが 青森県大館森山遺跡において變形土器の1類として相当数検出されている。須恵器も同じ大館森山において この柏田遺跡と同様に 环 紫などの小製品はみられず 大型の壇の破片のみである。¹¹⁾

珠洲焼と呼んだ遺物は、近年当地方でも出土例が多くなり、発掘調査で確認されたものは、大館市片山「館コ」⁽²⁾、比内町谷地中館においてである。地名からわかるように、中世の館跡ではあるが、その地の利用年代は、統繩文期から江戸初期までのかなり広い時期にわたっており、この遺物の絶対年代は確実につかめていない。

当地方において、土師期の発掘調査は数少なく、土師期全体の編年作業もまったくおこなわれていない。全体的に出土した須恵器は、秋田・津軽地方において平安後半期のものと同様であり、また編物痕を底面に有する土師壺は津軽において平安後半期に位置づけている。⁽⁴⁾

壺は糸切り内黒であり、平安後半期に位置づけられるものよりも深く、器壁が直線的に立ち上り、环形土器とは完全にいえないあきらかな壺形を呈する。以上のことから、壺鉢の珠洲焼と思われる土器を考えあわせて、平安後半期よりも下って中世前半期に位置づけたい。

柏田遺跡のものの大森台地は、かなり広い面積で、今次の調査はそのほんの一部分を掘り下げたにすぎない。

総 括

土砂採取のため崩壊した大館野遺跡をはじめ、本遺跡のように土木工事によって消滅する遺跡は、当地方においても年々その数を増してきている。

その中の1ヶ所にすぎぬ柏田遺跡の緊急発掘調査を行なったのであるが、その結果は、統繩文文化・土師文化の堅穴住居跡と土師器須恵器・中世の掘立柱建物跡と珠洲焼、というように、大森台地全体に統繩文期から中世までの文化の存在を確認し、古代末期から中世初期の大集落跡が存在する事実をつかまえることができた。今次はその数知れぬ堅穴住居跡のうち7戸と、掘立柱建物跡3棟を検出したにすぎない。あとは毎日ブルドーザーにより、歴史の一コマ、一コマが消されている。

出土した土師器は、当地方における土師器編年の中心になり、当時の人々の生活を知る手がかりとして、我々に多くのことを示唆してくれるであろう。しかし、人々の生活した跡は、日毎その姿を消している。

-
- (1) 斎藤忠岩崎卓也 大館森山遺跡 岩木山 …… 岩木刊行会
 - (2) 奥山 澄・板垣範芳 片山故コ発掘調査報告書第二次大館市史編さん委員会
 - (3) 奥山 澄ほか 比内各町中館発掘調査報告書 大館市史編さん委員会
 - (4) 前掲 大館森山遺跡 岩木山

謝 評

この期間中 必ずしも天気は 良くなかったが 大館工業高校の社会部員を引率された 同校教員の山田道雄氏及び 発掘にあたった 県立大館工業高校 県立大館商業高校 県立大館亂鳴高校 県立大館桂高校 有志諸君 及び調査員の方々 現場で特に有力な助言を賜わった 弘前大学村越助教授 方形鑿穴について 御教示を賜った 関西大学教授 永井規男氏 ブルドーザーやマイクロバスなどの御協力をくださいました 現地の日景建設社長 病氣の担当者のために 図の作成 原稿の整理にあたられた 日大農芸化学科富沢正雄 原稿の口述を筆記してくださった 県立大館商業高校 2年の掲発良子の鶴氏に 厚く御礼を申し上げる。



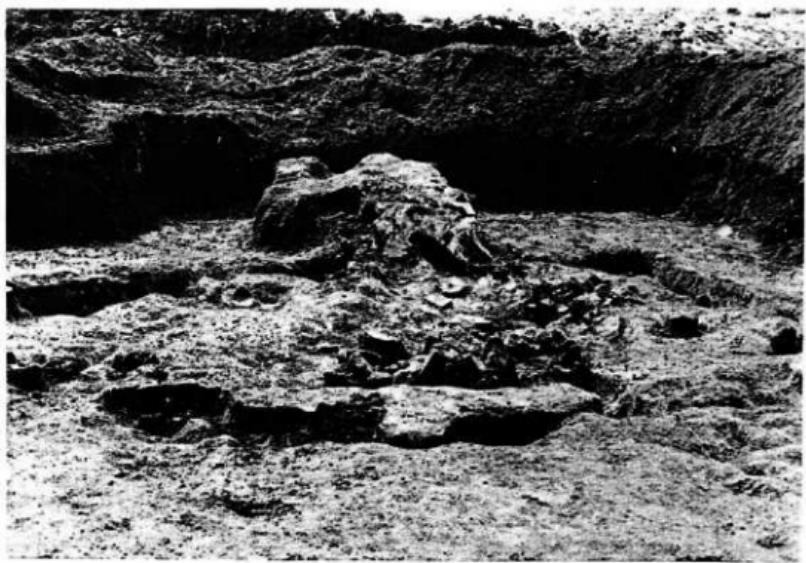
PL 12 遺跡付近写真



PL 13 遺跡写真



PL 14 [1] 第1号竪穴写真 北より



PL 14 [2] 第1号竪穴 カマド前庭部付近 北より



PL 14 [3] 第1号竪穴 墓出土状況



PL15 [第2号竪穴北ピット



PL 16 [1] 第3号豊穴 北西より



PL 16 [2] 第3号豊穴カマド前庭部 北東より



PL 16 [3] 第3号竪穴カマド前庭部掘り込み部 東より



PL 16 [4] 第3号竪穴カマド断面写真



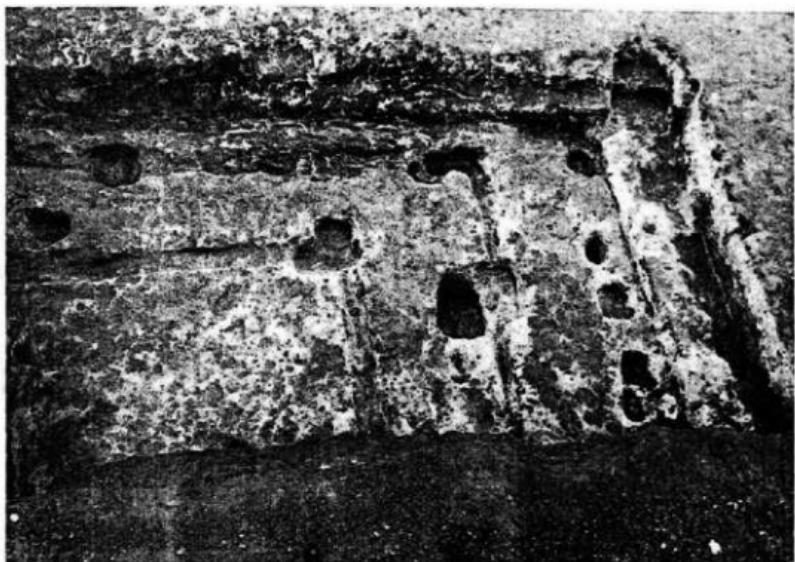
PL 16 [5] 第3号竪穴 北東部 拡張部



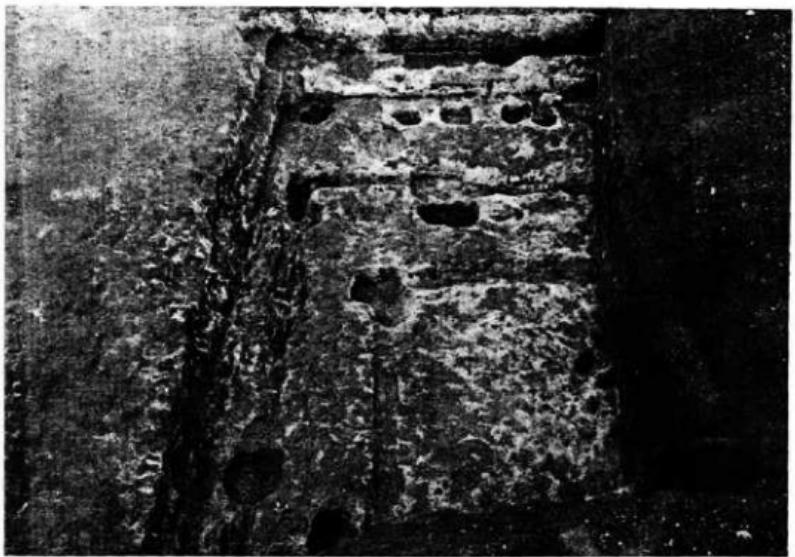
PL 16(6) 第3号竪穴 カマド前庭部



PL 16(7) 第3号竪穴 墓出土状況



PL 17 (1) 第4号竪穴 東より



PL 17 (2) 第4号竪穴 南より



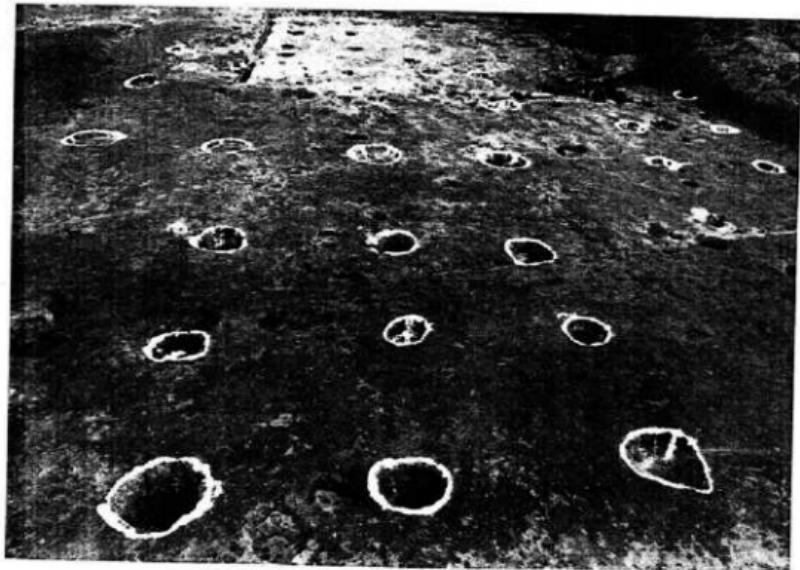
PLI8 [1] 第5号竪穴 南東より



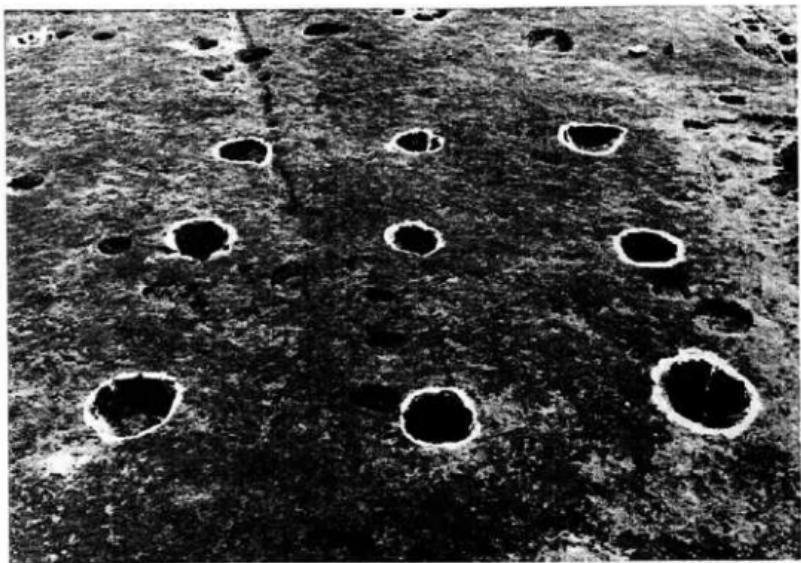
PLI8 [2] 第6・7号竪穴 北より



PLI9 (1) 捜立柱建物 東より



PLI9 (2) 捜立柱建物 西より



PL19 (3) 円柱据立柱建物 北より



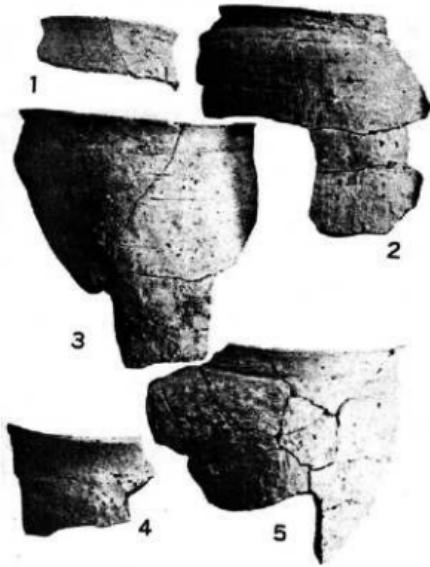
PL19 (4) 角柱据立柱建物 北より



PL 20 出土土器



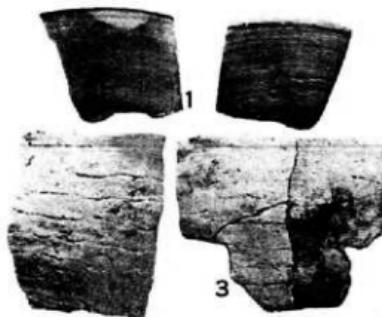
PL 21 出土土器



PL 22 出土土器



PL 23 出土土器



PL24 出土土器

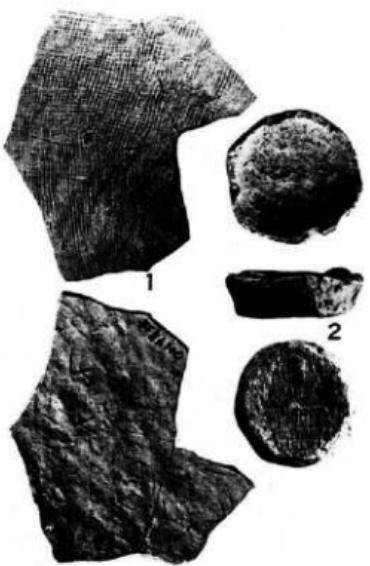
PL25 出土土器



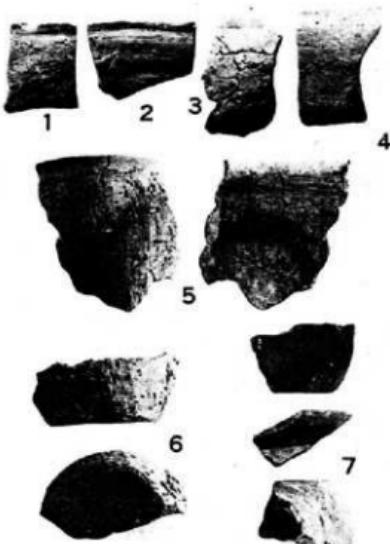
PL26 出土土器



PL27 出土土器



PL28 出土土器



PL29 出土土器

大館市柏田遺跡発掘調査報告書

1974・3

(代) 奥山 潤

大館市教育委員会

大館市谷地町後

印刷 (株) 大館孔版社
